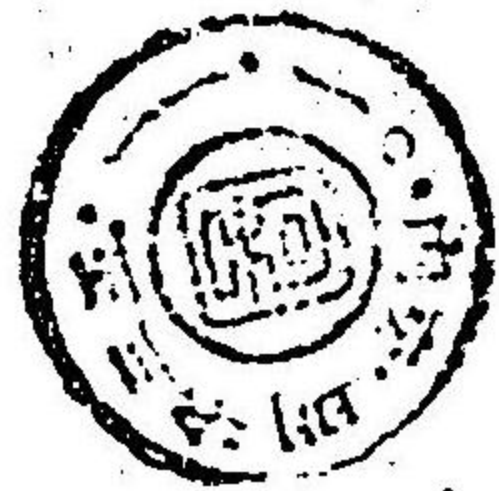


書 著 件 露

*
 も 雲 ひ き さ
 つ の と く
 れ り 濱
 絲 袖 ね 松 船

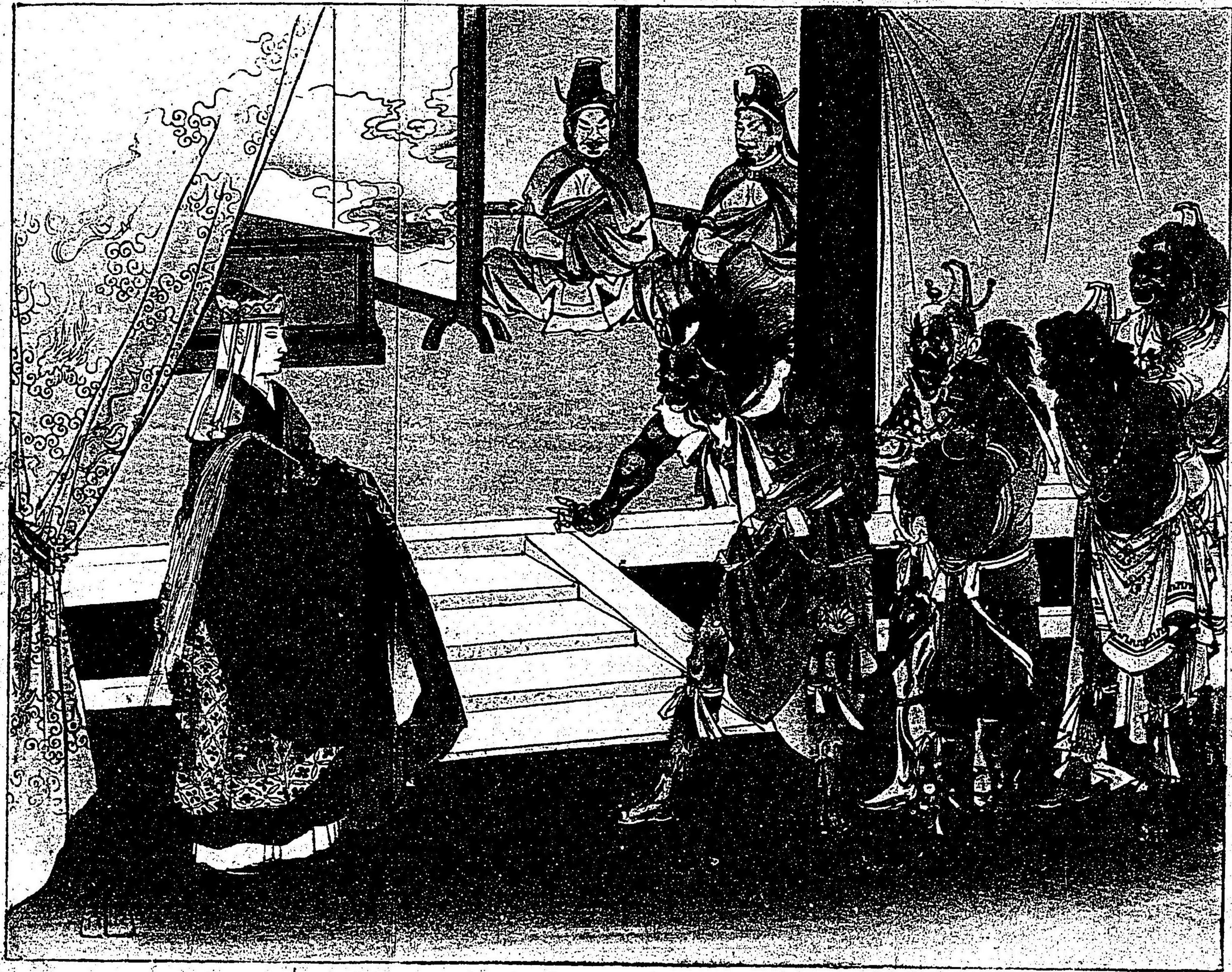




露伴著作

※

勇	勇	三	新	五
魚	魚	保	羽	重
捕	捕	物	衣	之
後	前	語	物	塔
編	編		語	



三玄
藏眞
西遊
記



發
端

幸
田
露
伴
編

一 端 發

明治の御代の年少き諸君は、曠て皆此御代に光りを添ふべき階
君なれば、誠實勇健剛邁堅忍等の徳をば蓄へ養ひて、長じた
る後継横無碍に我が國のため我が皇のため我が父母のため我
が兄弟のため姉妹のため乃至世界の人のため、我が身よりい
と輝ける光明を放ちて働くべき覺悟無くしてはあるべからず。

されば魚を求めんとするものは木に縁らず山に上らんとするものには船に投せざるの理を以て、光明を未來に揚げんとする雄志勃々たる諸君は、暗き昔時の遺物ともいふべき荒唐無稽の小説の西遊記なぞを播き玉はで、其代其代に光輝を添し賢哲大人傑の身上につきて記したる虚妄ならぬ書をもを讀み、如何に往時の人々が志を立て功を成せし歟、如何なる方に如何なる色の光明を揚げし歟を問ひ質して、或は之を學び或は之を贊し、或は考へ或は論じ、かりそめにも好き嫌樂を取るべし。楠樟の手箱に藏むれば紙は自然香ばしくして蠶に蝕まれず、油の樽の傍にあれば茶は自然味を失ふ道理なれば歴史の上にも嘉名を殘せる賢哲大人傑等に親まば必ずや其益あるべく、妄誕不經の雜書なぞを愛さば害も必ず有らむ。また蠅蛆は汚穢に簇り、鳳凰は梧桐に棲むのならひなれば、

き當時の諸君はかならず西遊記の如き陋劣笑ふに堪へたるものを親しむこと無く、正しき書をば好まるとなるべし。雅正の籍にあらざれば觀ず、聖哲の風にあらずば傲はず、とは苟くも世に大望を有する人には無くて叶はぬ幼き時の心がけなり、されど西遊記といへる書は全く絶えて無きことのみを作り設けしものにはあらで、彼博望侯張鷟をさへいとことしく載するはどの支那の歴史の中に於て珍らしくもまた極めて大なることのありしを骨となし、妖怪變化の妄譚を皮肉となして作りしものなれば、其書の漸く廣まるに従ひて其捏造の假話のため眞實に存せしことも大空談の根柢とせしほどのもれたる觀あれど、元來希有の大架空談の根柢とせしほどのことゆゑ、其事實は眞に希有の奇事快事にして、たゞに快奇の事なるのみか又開を聞かば憎夫も立つべく食夫も慚づべく

年少き諸君は取つて學ぶべきいと目ざましき事實なれども、
古來學者の此事を云はざるものは、其事皆釋氏の道に屬せる
ため、公平ならざる支那の歴史家等の毫も稱揚せざりしに本
づけりとも云ひつべし。我今これより其事實の大概を述べて
諸君の餘閑を消するの具とせんとす。されども敢て諸君に釋
氏の道を奉せよといふにはあらねば、諸君も釋氏の道に屬せ
ることゝて妄りに擯け玉ふべからず、韓愈は悪き人ならざり
しも心きはめて狭くして妄りに釋氏を擯けしかば、胸潤くし
て眼高き後の人には笑はれぬ、歐陽修は世のためにも功もあり
ける人なれど歴史をつくるに猶偏頗ありて佛氏のことを載す
るに極めて粗漏なりしかば、同じく後には冷笑されぬ。教義
を論ずる上にては釋氏を斥け破するもよし、儒道を淺しとい
ふもよし、基督教を取るに足らずと云ひ傲さむもまた可なり

といへど、人を論ずるに當りて直ちに其人の信するところの
道によりて取捨せんとなし、又或は其事實をも斥けんとする
は實に誤れり、其人をもつて其言を棄てずとさへいふに人の
奉せるところをもつて其實を斥けんとせば道理あることと云
はるべきや。魚を釣りたればとて太公望を捨つべからず、草
履取りを仕たればとて太閤秀吉は豪傑なり、まして人々自己
が天より稟け得し才に從ひて某事につき有らん限りの力を盡
し心を傾け豁れて後に初めて已むは是則ち大丈夫なり眞男兒
なり、假令其事賤しとも決して斥くべきにあらず。刀鍛治の
道に至誠を致せし正宗宗近等を刀鍛治なりしが故に賤しとな
さば其は狂人の評にして、農事に心を盡したる大藏永常二宮
尊徳等を百姓のことせしもの故に取るに足らずといはば愚者
の暴論とより云ふはか無からむ。すべて自己が職業に誠實な

るは世の文明を進むる所以のことなれば即ち仁なり即ち義なり、
事業に誠實ならざるは即ち不仁即ち不義なり。大丈夫と
は自己が事業に飽まで誠實なる人の上に云ひたることにして
正宗宗近等は鍛冶の道の上の大丈夫なり英雄なり、明珍は甲作りの
大丈夫なり、永常母徳等は農業上の大丈夫なり英雄なり、
雪舟探幽は畫の道の大丈夫なり、明珍は甲作りの大丈夫なり、
永常母徳等は學問上の大丈夫なり、北條時頼徳川家康等は政治上の
大丈夫なり、若し或るを尊び崇めて或るを賤み斥けなば、楯を作
るもの仁者として矢を作るもの不仁者となすの痴論に等しからむ。
衣織るものに大丈夫あり、家建つるものに大丈夫あり、病を治すも
のに大丈夫ありしによりて、我等は其恵みを今も受け居るな
れば、彼等は即ち仁者なり、若し衣織る者衣織ることに誠實

ならず、家建つるもの家建つるに誠實ならず、病を治むるも
の病を治むるに誠實ならざりせば如何に。彼等は不義の奴に
て、彼等がために我等は今も北海土人の着居ることアッシ
のやうなる者を身に纏ひて、笹葺堀立柱の家に住居し、病あ
りても怪しき草の根を噛み居るなるべし。細に觀れば我等が
頭の上の帽より足の下の履物其他に至るまで皆それの道
に盡せる大丈夫の恩恵によりて得たるなり。されば此理を推
して觀むに如何なる小き技にもあれ其技に能く誠心を盡せ
る人は大丈夫にて、恩恵を世に垂れたる尊き人といふを得べ
し。西遊記中に主人公とせられし玄奘三藏は釋氏のことゆゑ
佛法のたれに誠を竭せしなるが、佛法の可き否きはさておき
自己が事業のたれにせし玄奘法師の勤勞は、傳ふべくまた學
ぶべきことにはあらずや。年少き諸君の中、佛法の事とし云

へば一概に嫌ふが如き誤りたる思想を或は抱かる人も有らん
かとして斯く長々しくも思はず筆を滑らせしが、いで玄奘が西
遊の眞實の記をもものする傍ら其一生の傳を演べん。

其 一

支那國隋の代の末に陳慧といふ人ありしが、慧は即ち玄奘三
藏の父にて、河南陳留に住へり。慧の父をば康といひて學問
優れたりければ齊の代に擧げ用ゐられて國子博士となり、其
また父の歿といへるは後魏の代に上黨の大守となりしものな
れば、玄奘はまづ名家ともいふべき家の系に生れ出しなり。
殊に其父慧といへるは、才秀で心清く、能く經術に達せしか

ば、江陵の令に擧げられしも隋の政事や亂れたるを厭はし
く思ひてや職を辭して身退き、靜かに聖經賢傳を閲し味ひ居
けるほどの君子にて、身の丈八尺、眉美しく目明かに威儀堂
々たる人なりければ、其人の子に玄奘如き稀代の功を立てし
ものゝ出でしも更に怪しむに足らずといふべし。慧は四人の
子を有ちしが、玄奘は其第四子なり。年尙弱かりし頃には其
名を禕と呼ばれ居し玄奘は、幼きより既心聰く普通の者にあ
らざる様の時々あらはるゝことありければ、父もひとしは思
愛しけるが、年八歳の頃のことにて最感すべきことありけ
り。一時父は玄奘に對ひ、諸君も定めし知り居らるべき孝經
といふ書を口づから教へ授けしに、曾子席を避くるといふく
だりに至りて、忽ち襟を整へて席より突と起ちしかば、父は
玄奘何故起ちしと怪みながら所以を問ふに、さればに候父上



漢書
卷之
一

曾子は自己が師の孔子の命を聞くにも席を避けられしとある
 を、玄奘今しも恩高き父上の御訓をば受け奉るにあたりて安
 坐すべきにあらずと、今讀み習ひし書のおもひきを直に我身
 の上になして實行せんとする健氣なる精神を明かしたり、眞
 に大人も及ばざる心の用方なれば、父は大きに悦びて、此
 兒かならず行末は何事にもあれ貫き遂げて名を揚げ功を成す
 なるべし、行ふに敏きとはかゝることをこそ云ふなれ、我が
 兒ながらも天晴なる敏きものゆる未だのもし、あらずしや
 と玄奘に對ひて褒めこそはせね、妻にも親類なせにも語りて
 互ひに長き生先を樂みます、いづくしみぬ、それより漸く
 年長くるにつれて経書に通達なし、かりにも竹馬競走とさ
 取るに足らざる童兒戯樂をいたづら兒童の群に入りて爲すこ
 とも無く、隣家の大娘さま對門の老翁さまなせ、益無き談話

もせず、戸外を通る館屋菓子屋の或は鐘をば撃ち鳴らし或は
 節をかしき歌唄ふもあり、又眼さ目鏡僂僂師等のいるくさ
 まく面白げなること云ひ唯して兒童を招くもいと多けれど
 思を散らす心を移さず、兒童婦女は雲の如くに奉りて笑ひさ
 さめささても可笑き館屋かな、あら面白き目鏡かなんぞよ
 摩し願ぎても玄奘はたい小齋に居て眼を聖人賢人が説き遣こ
 されたる書に注ぎ、眼遣ひ一つ戸外には爲さで、開あればた
 い父母の機嫌を候ひ、庭園に徐歩を試みて靜に鬱を晴らすの
 み、絶えて鄙しき娛樂を取ることばせで、聖賢の風を私に慕
 ひ仰ぎ、我れも人なり堯舜禹湯文武孔子も人なれば、學んで到
 り得ざる地のあるべき所以あるべからず、我願はくは徳業を
 もて千古に立つの人とならむ、と切りに苦學したりけり。三
 人の兄の中第二の兄は先だつて出家剃髮を遂げ、東都の淨土

寺といふに住ひけるが、玄奘が所行謹愼深く心操また清く高
 くて、人慾の争ひあさましき世の中の富貴利達を食らんとせ
 ざるは、法の門に入りて貴き教を世のために廣むるに能く堪
 へたるものと見定めければ、連れ行きて自己が房に住まはし
 め日に、佛の道の理をば説きて聞かせけるに、玄奘忘るこ
 と無く學び、十一歳にてはや維摩經法華經などいへる經をば
 滞り無く誦するにいたりぬ。其頃俄に勅命ありて洛陽にて僧
 を度するふことありしに、我こそ選みに當らぬ、と何れも業
 の優れし者數百人はと集まりけるが、玄奘は年尙弱ければ然
 る心も深くは有らで公門の側に立ち居けるを、時しも通りか
 りたる大理卿の鄭善果といふ鑑識あるもの打見るからに立
 ちといまり、此兒大に見どころありと思ひて、汝は何姓なり
 やと姓氏を尋ね、また汝も度を求むるかと思ひ試みぬ。玄奘

答も明らか、陳留の人陳玄奘と名乗りて、我も度を求むる
 の心ありと云ひければ、鄭善果は猶推し返して、汝出家を求
 むるとも髮を落して願を圓めし後は何をか爲さんとする所存
 なりやと、むづかしく云ひ試みるを、玄奘ふたふび推し戻し
 て、別に異なる所存も無し、出家を遂げしあかつきには遠く
 如來の道統を紹ぎ、近く遺法を光かさんと思ふ、と大膽不敵
 にも理の當然を云ひ放ちぬ。あはれ齡にも似合はざる氣味よ
 き、言を出せるものかな、蛇は寸にして蛇の勇氣あり、柳橙
 は二葉にして柳橙の香ありとは、此童のことを云へるなるか
 あら恐るべき童兒よ、と舌を捲きて驚きたる鄭善果は、つくづ
 く玄奘が志の健氣なるを嘉みし、また其容貌神采の、拔群なる
 に敬服なして、遂に幼稚の玄奘を取つて度しけるが、此童學問
 誦の業は未だ足らぬと其は成し易し此志此器量は得難き者

ゆる此童を度しぬ、後來かならず佛法の光を揚ぐる大丈夫と
此子はならむが、但我も諸公も此子が雲居の天に翔翥ちて
露の法の味ひを普く世間に瀰くを見るにいたらで死なむが恨
めしと同じ後條に語りしとぞ、度されて沙彌となりしより玄
奘あきすすく卓然として獨立なし、口に誦するも目に視るも必
ず經論のみを取り、殆んど閑なく勉強しけるが、同じ寺中の
年また弱き沙彌等の滑稽話に隨ぎ、益無き遊戯をなすを觀
て、經にも云はずや、出家は無爲の法を修むる者たりと、さ
れば出家は塵寰のことに心を亂さず、寂然として徳を積み功
を累ね、業成りて後迷へる者を救ふべきに、何とて兒戯を恒
に爲すべき法のあらむ、たいに百年を喪はんは實に悲むべき
沙汰なりと歎息なして諫めける。時に景法師といふものあり
て涅槃經を講せしかば巻を執りて之に従ひ、度食をさへ忘れ

て學び、又嚴法師といふものに攝大乘論を學びしが、再び覽
たる後は皆暗んじ記えて遺るゝこと無く、講坐に昇りて講じ
けるに、細かに道理を辨じ割き意義をば開き陳ぶるに曖昧糝
糊たる箇所も無く、師の講義の意を一毫も失はずして説きけ
れば、衆僧驚き異みて、神か菩薩の化身かと稱揚すること一
方ならず、時に歳わづかに十三なりしがこれより芳名は流れ
て四方に聞えける。其後隋の世は亂れて衆傑各自一方に據り
天下は勇者の劍戟をもて互ひに争ふ修羅場と變せしにより、
玄奘は、此地は父母の邑なれども喪亂斯の若くなれば、いと
も危きところとなりぬ、空しく此所に居りて死なむは甲斐無
き事の限りなるに、彼長安といふところは安きよしにて、天
下の民父母に歸するが如くに趣けば、かならず宜しきことあ
らむ、如何に兄上、もるともに彼長安には行き玉はずや、と

兄の長捷法師に説きすゝめて遂に兄弟長安へ行きは行さしが
 此地もまた孫吳の兵法を尋む場合なれば釋氏の道なと問ふも
 のなく、京城中に唯一つの講席さへもあらざるにぞ、玄奘深
 く悲みて、空しく憮然として打歎きぬ。されども空に日を過
 さんば本意にあらねば蜀のかたに高僧多きを聞きしより、
 陰一寸尙惜むべし、願はくば蜀の方に行きて高僧に遇ひ業を
 受けんと、兄をすゝめて子午谷を過ぎ、漢川にまで進み入り
 しに空、景、二人の法師に遇ひ、これに従ひ學を受けて遂に
 四人とも、成都に到りぬ。成都は亂も無かりしかば、天
 の僧侶あつまり居りて、法筵の開くることも少からぬに、
 奘悦び勇みて基遁法師に攝論阿毘曇論等を受け、震法師にも
 就き學びて出精夜を日に繼ぎて勤めけるが、二三年を経るに
 及びては諸部の經論に通達して、各所の講坐の下に集まる僧

は百人二百人或は三百人近くあれども常に其等の僧の右に出
 づるに至りける。年二十一の時兄と共に空慧寺といふに住せ
 しが、私に自ら惟ふには、學問は固陋なるべからず、たゞ一
 方を尊み仰ぎて他に尙深きものあるを知らずば所謂井蛙の見
 ならず、いでやこれより益奮つて諸方の名僧碩徳の教を受け
 む、と奮發なせしが、兄の長捷の扯きといめし故私に商人等
 に興し、舟を三峽に汎べ、江に沿ふて通れ出で、荊州天皇寺
 といふに到り、北を廻りて相州に行き、又長安に至りては大
 覺寺といふに到り、止まりけるが、此間休法師、深法師、岳法師、
 常法師、辯法師等に從ひて勉強苦學云ふばかりなかりける。

其二

立たてたりしては其の頃に高き諸宗の僧等を訪ひ盡し、詳かに彼此の道を
 理を對照研究するに、甲の説くところは乙の説くところと異
 なり、東に是とするところは西に非とせられ、互ひに矛盾す
 る様あり、これを一々經文に驗して見るに、亦或は明かに思ふ
 ひあたる節あるも有り、左なきもありて、際涯を知らざる大
 洋を望むがことく、何方に我が身を寄せんと思ひ定むべきす
 べもおぼえねば、何とかして佛法の眞の道理を確めたく思ふ
 念の増長するばかりにて身をもがきける、されど國中に名あ
 るはどの者は殘さず訪ひ試みたれば、今さら新に師を得べき
 望のあるべきにてもなし、所詮は佛法もと印度より此土に流
 傳はりし者ゆゑ、今も印度には學解も遠く徳行も秀でし人

のあるならむに、其を訪ひ求めて我が師と仰がん他には取る
 べき道も無し、とはおもへども路遠く風土も甚だ異なりたれ
 ば、妄りに行くを得べきにあらず、さりとして今は此地に止ま
 り空しく疑惑の霧の中に長く彷徨せんことも望ましからずな
 りたるが、兎せん角せむ如何にかせんと、さまざまに思めぐ
 らしける。玄奘つくく又思ふに、此身は妄に惜むべからず
 古昔よりの大丈夫皆一身を性となして何事にもおれ爲すこと
 あるを例ひとするに、我一人身の安逸をば願ふべきや、寒暑
 も定めし差ふべき萬里の旅に身を妻さば、苦しく悲しき事も
 あらんは必定なれど、大丈夫の事を爲すにあたりて辛酸を忍
 るべきとき卑劣の念はあるべからず、瘴煙毒霧何かあらむ、
 三世の佛も照覽あるべし、玄奘佛法の眞理を尋ね一切衆生と
 諸ともに利益を得んがために西方天竺に遊び學びて、第一に

は先づ惑ひ疑ふところのものを治く天竺の智者に問ひ決し、
 第二にはたゞ其名を聞いて未だ其書を見るを得ざる瑜珈師地
 論といふところの意義深淵なる論を取つて衆疑を其に釋さつ
 べし、第三にはまた大恩教主釋迦牟尼佛の靈蹟を巡拜なして
 廣大の教を世間に垂れたまひし恩を聊か謝し奉らむ、第四に
 は北砂漠を渡り、西葱嶺を踏み越えむに、途中の艱難恐ろし
 かるべきも其にて自ら道念を飽まで鍛ひ堅くなし、精進勇猛
 の徳を成し行ひを修め、誓つて中途に萎靡することなき解怠の
 念を生ぜざらむ、第五には我幸ひにして事無く西方諸國を經
 廻り、高德名師に知遇なして佛法甚微妙の理を會得し、乃
 至いまだ此支那に入らざる佛説の經文菩薩の論文等を得るこ
 とあらば、歸りて後に一生の力を盡して世のためを得たるを
 願ち疑ひを祛き、利益あるべきものを譯して、上は佛恩に報

ひたてまつり、中は佛法の光輝を添へ、下は衆生の迷を開き
 悟に至るの道を闢かん、此身は惜めど盡くるときあり、此心
 をば空しく爲難し、いで大願に身を獻げて、我がため、他の
 ため、釋迦文佛のため、佛法のため、僧のため、錫を陽關の
 外に飛ばして、草鞋遠く鐵門の霜をも踏み、雪山の雪をも踏
 まん、假令我が身の我が意に任せで中途に斃れ虎狼の牙にか
 ゝるとも、もとより法のため死するに何を悲むことのある
 べき、死生は命なり、善事に死さばまた大丈夫の大快事のみ
 死すとも更に恨みんやうなし、昔時法顯智嚴の輩、遠く西方
 諸國に行きしも、皆能く法を求めて衆生を導かんとの大願に
 身を委ねしなるに、其後絶えて其高跡を追ひ其清風を慕ふも
 の無きは、まことに遺恨なり、彼も僧なり、我も僧なり、大
 丈夫まさに彼等に繼ぐべし、と遂に奮ひ立つて伴侶を結び、大

西天に行かむことをば計畫ける。伴侶も漸く出来しかば、表
をたてまつりて、此度我等法のため西方諸國に行かむとする
よしを委しく申し出でしに、事例少きことなれば、詔ありて
許されざりけり。勅命おもふ如くに下らざるを見て、伴侶の
者は皆誓言を反故となし、詔に背くは恐れ多し、我等は思ひ
絶えたり、と勇氣たちまち挫折なし、云甲斐無くも退きけれ
ど、事を成すもの一頓挫に心を變ふるごときことあるべきに
はあらざれば、玄奘はますく屈せずして却つてひとしは勇
氣を増し、頼むに足らざる同行の無きも中々心強し、大事を
成すに他力は要らねば、我一人にて事足れり、詔ありて許さ
れざるも、是れ我心を試むるそもく一ツの障礙のみ、黄金
は辭せず猛火の焚くことを、歳寒正に見る松栢の青さを、玄
奘こゝに黄金たり松栢たらば許されざるも驚き迷ふことある

無からむ、一度心を決せし上は是非萬障千難を排して進まざ
るべからず、若し我が願望の非理ならずば、佛天も冥加し玉
ふべきに、何をば恐れ何にか屈せん、と臍を固めて決定しけ
るが、思ひの餘り夢にさへしばく、西土の事を見るに及びぬ
涯際を知らざる大海の中に登えし高山あり、金銀等の寶をも
つて成れるとおほしく、美しくも光り輝きわたれるさま、
看る眼も眩き心地のするに、玄奘ひとり彼山に上らんものと
思へど、漫々たる水藍より青き空より下す風烈しくて白浪
しきりに立ち狂ふ其物凄さ云はむ方なく、渡さむ船のありと
も見えねど、意を決して彼山に是非に上らむと水中に跳り入
れば、不思議や忽ち水中より石の蓮華の湧き出で、足をば見
事に支へたり、尙彼山を心當に進めば、一々水中より足に應
じて蓮華の湧き出で去るに隨ひ消え行くにぞ、須臾して彼



山の下に思ふよりいと易々と到りつさぬ。されども山は峻し
 くて恰も鼓を立てたるごとく、登るべき道さらに無ければ悲
 しさ云はむ方も無く、少時は其所に佇立しが、試みに身を稱
 らするに、身は輕々と虚空に騰りて、強風我を扶くるごとく
 上り昇りて寶の山の其絶頂に到るを得たり。あら嬉しやと四
 方を見るに、廓然として眼に礙るものもなく、浮世の外に出
 でしやうなるに、跳り上つて喜ぶ途端、忽然として我に復れ
 ば、枕頭燈火細くして屋角に鳴る風寒く、たい思ひ寝の夢な
 りけるが、遂に貞觀三年の秋八月に首途なして天竺國へと志
 しぬ、出發の時玄奘は何歳なりしや、慧立は二十六歳と記し
 道宣は二十九歳のやうに云ひ假し置けるが、何が真か知るよ
 しなれば、疑はしきをば其まゝに此所に二ツの説を擧げ置
 く。

其

〇

二

七十二

其 三

秦州の僧孝達といふもの京に出で居りて涅槃經を學びけるが
 功畢りて故郷へ還るを幸ひの道づれとして諸俱に秦州へ立
 ち越え、一宿せしに、又時よく蘭州の者居たりければ、其者
 と共に蘭州に到り、涼州の人の官の馬を送りて歸るに跟き隨
 ひ、涼州に到りて、一月餘り停まる間に、俗人僧侶等のため
 涅槃經攝大乘論などを講じ聞かせけるが、涼州は支那西部の
 果にて、西蕃諸國の胡夷ども往來通行するところなれば、其
 講筵の盛んなるを見聞なして玄奘か此地に來りし所由をも嚼
 に聞き知るものからに、故郷へ歸りて珍らしき話の種となし

斯くく法師のありて西の方天竺國に法を求めんがため涼
 州に來れりなご、遇ふ人ごとくに語りければ、番夷の中にも心
 ある酋長等は其志を尊じとして心待に玄奘の來む日を待ちた
 りける。講義も漸く終りしかば、何時まで如是であるべきと
 玄奘は出立たんとせしが、此時恰も亂後なれば百姓の蕃國に
 交通するを禁じありて、都督の李大亮といふもの嚴しき勅を
 堅く奉じ、蕃國へ出んとする者を切に禁め居けるところ、玄
 奘といふ法師一人如何なる意にて歟長安より遙々此地へ來り
 しが猶西國に行かんとするよし注進するものありければ、そ
 れと下知して玄奘を忽ち捕へけるほどに、玄奘たちまら捕へ
 られぬ。法師汝は何をせんとて特に長安より西國へ行かんと
 するか、心得がたし、國禁あるをも知らざるや、と李大亮の
 問ふに法師は惡びれず、別に異しき圖もなし、たい佛法の秘

遊を採り、瑜珈師地論を求めんとて、身命を惜むこと無く西
方に遊行を企てたるまでなれば、願はくは微衷を憫み察し玉
ひて、事無く西方に行かしめ玉へ、と答へければ、單身萬里の
夷境に入るも利慾のためには或は爲さむものあるべけれど、
利慾に離れし法のためには國禁をさへ犯してもと思ひ立つたる
玄奘の其健氣さに感歎なし、却つて法師を見逃して其望みを
ば果さしめんと思ふ心の無きにあらねど、國法なれば是非も
無く還ることをば勤めけるが、法師表面は従へども心の中に
は屈すること無く、退きて後西方を指して竊に出立しけるに
河西の佛者の棟梁と仰がれ居ける慧威といふもの、法師がこ
とを聞き知りて深く隨喜の念を生じ、道整惠琳二人の弟子を
密に送りて従者たらしめしかば、玄奘二人の従者を得て、こ
れより晝は隠れ潛み、夜のみ竊に歩みくつて、瓜州といふに

至りける。瓜州の刺史の獨孤達といへるは、法師の來りしを
見て大きに敬ひ歡び、篤く待遇したりければ、渡りに船を得
し思ひして西方に行く路を問ふに、これより北に進むこと五
十里にして鄯盧河といふあり、其河上は狭ければ下は極めて
廣くして、渦巻き流るゝ水駛く、底深ければ渡り難し、其上
に玉門關といふ關ありて、其所に由らねば他に路なく、即ち
西の境の咽喉なり、扱また關の外に至れば、五つの烽火臺あ
りて、各相去ること百里、番將ありて備り居れるが、此路の
中臺あるところを除けば水草あること無く、いと難儀なる道
なるが、それより先は其にも増して平沙漫々たるばかりの莫
賀延の沙漠にて、即ち伊吾の國境なり、と答ふるを聞きかね
て覺悟は仕ながら、また今更の事におもはれ、愁へ憂ふる
時も時とて、乗りて來りし馬さへ死せしに、爲すべき術も更

に無く、如何にして猶西方に進み行かんと思ひ屈し、半月ばかりも案じ煩ひしが、涼州よりまた驛状ありて、字を玄奘といふ僧西蕃に入らんとて密に行けば、所在の州縣宜く嚴に捉ゆべし、と云ひ來れるを、州吏の李昌といふもの必ず法師がことならむと推察なして密に驛を法師に示し、此玄奘といへるは君の事にはあらずや、匿さずとも眞實を明かし玉ふべし我師のためには圖るべければ、と眞心を面に露して云ひくるに、法師は是非無く眞實を明かし、我は實に玄奘なるが、求め法のためには西域に行かむとすなる眞心を憐れみ何卒見逃し玉へ、と云へば、李昌は感激なし、眼の前にて彼驛を破り、此驛はかく爲したれども長らく此地邊に止まり玉は御身のため宜しからじ、たいく早く立ち去り玉へ、と諫め呉れける。立ち去りたきは山々なれど、前途の危さ恐るしさに加へ

て馬さへ失ひたることなれば、茫然として憂ふるのみ。従へ來りし道整は先に燧煙に向つて去らしめれば、惠琳をのみ隨へ居けるが、これも遠路に堪へざるべきを察して之をも放ち還らしめぬ。所有品を賣りて馬一疋を辛くも買ひ得は仕たりしが、幸く者の無きに困り果て、停まり居たる寺の彌勒像の前にぬかづき、何卒馬を牽くものを得させ玉へ、と祈りしは、道理せめて惘然なりしが、道場の中に禮拜なせる折しも忽然一人の胡飄然として入り來りぬ。姓氏を問へば姓は石字は盤陀といふよしにて、骨格太く逞しく、いと嚴めしき男なり。あはれ如是者を得て馬牽くものとなすを得ばや、と思ひ居る中、彼胡は進み來りて受戒を請へば、便ち五戒を授け遣りしに、胡は喜び立去りしが、少時ありて餅菓物などを齎して禮に來りたり、玄奘再び彼胡に意を注げて候ふに、應



對振りも明かに賢げなれば、引きといめて、我はこれより五
 烽臺のあたりを踰えて行かんとおもふが汝我をば送りくれず
 や、といへば、胡人は承諾なし、師をば送りて五烽臺を過
 しまるらせむ、と意に従ひけり、寂莫無人水草もまた無きと
 こるへ進み行くに、案内者をば得たるなれば、玄奘大さに悦
 び勇み、特に胡のためにと着替の衣旅荷物の中の物など賣
 代なして馬を買ひ明日共に出立せん、と約束を堅めけるが、
 其日にもなりければ玄奘馬に跨がりて一むら茂げれる草の中
 を分け行く時しも、彼胡人は、一人來べしと思ひの外に、一
 人の老いたる胡を伴ひ、毛色の赤き瘦せたる老馬に鞭を加へ
 て追ひかけ來りぬ、老翁なんぞを伴ひ來しに玄奘大さに怪ば
 す、黙然として佇み居ければ、少き胡は口を開き、此老翁は
 極めてよく西方の路を知りたれば、伴ひ來しにて、三十餘度も

伊香國に往來したりし者につき、尙能く西路の模様をも聞き
 取り玉はん爲にと具してまゐりぬ、此老翁が言葉をも聞き
 猶ひとたび考へ玉へ、と、昨日五烽の先までも送りまわらす
 べしと云ひし語氣には違ひて怯れしやうなる口氣をもつて語
 りける、老翁はやゝにちり出て、西方の旅の危きこと、道路
 の險惡なるは云ふも更なり沙漠の風の恐ろしきは言語に絶え
 て言にも及ばず、徒侶多くてさへ猶或は行衛知れずになるも
 のもあることなどを説きて、まして法師はたい一人なれば無
 難に沙漠を越えんこと中々もつて覺束なし、自ら事情を斟み
 量つて思ひ止まり玉ふべし、妄に身命を捨て玉ふな、と道理
 ありげに諫めけるが、玄奘は既胸の中に預て覺悟のあること
 なれば、翁が言葉は道理なれど我長安を出でしより生命を惜
 む所存なし、大法を求めむとして出でつる上は、中途に死す

ることあるとも、天竺國に到らずして生きて歸らん願ひなし、諫めは断じて無用なり、死しても悔ひざる我が心は石にあらねば轉ばすべからず、何條今更沙漠の路の恐ろしうとて後に返らん、と烈しくも云ひ破れば、翁は再びまた言はず、法師いよく進み玉は、我また何とて止め申さむ、たゞ我が此馬に乗りて行き玉へ、此馬伊吾へ十五返も往き戻りせしものなれば能く道を知り居るにつき何かにつけて好きことあらむ、師が乗り玉へる馬は少くて遠く行くには堪へ難し、と告ぐるに、玄奘悦びて乃ち馬を交換ける。翁は禮拜なして退き日は山の端に傾きしかば、我等が歩むに屈竟の時は來りぬ、いざ打立たん、と少き胡を催促なして其所とも知れぬ道を辿り、馬を切りに進むるに、三更過ぐる頃漸く遙に玉門關を望みぬ。關を去りて流れに沿ひ上ること猶十里許りすれば、雨

岸の相距る潤さ一丈餘りなるところに出でける。胡人は路の傍に生へる梧桐樹を斫り倒しては河に架し斫り倒しては河に架し、葉のつけるまゝの細枝または其邊に繁れる草なを根こぎにしたるを横たへて辛くも橋に似つかはしきものを作り成し、いざ疾く駆けて渡り玉へと云ふ。危さは身も冷え膽も縮むはどなれども、玄奘勇を鼓して一ト鞭當つれば、馬は躍りて忽ち對ひの岸に着きぬ。胡人も同じく馬を躍らせ、難無く河を渡りけるに互に嬉しさに堪へで、今宵は此所邊に憩はむと少しく進みて地を擇み、とある樹蔭に馬を繋ぎ、和衣の匣りを取らんとして、玄奘は胡人と五十歩餘り隔てたる小草の布ける地に坐しけるに、此所は、や是れ關の外の人里絶えたるところなれば、鐘の音狗の聲も聞えず、露冷かに衣の袖を濡すのみにて寒々たる星の光りも物凄く、淋しさ聲へんもの

も無し。眼は神を休めんとて閉ぎ居れども、流石心細さに玄
焚はうつら／＼となし居けるが、怪しくも人の寤音すれば密
に眼を明き伺ひ見るに、星の明りの微なれども闇にきらめく
刀を引き抜き、此方に向ひ進み来るは正しく従へ来りたる彼
胡人なり。さては胡人め、心變りして、五烽の彼方まで我を
送り行くことの憂さに我をば此所にて殺害なし、荷物を奪ふ
て歸らんとするにや、如何はせんと驚き怖れて手に汗を握り
つむるに、何とかしけん彼胡人は思ひ返せる歟とおぼしくて
腫を回らし我が座に歸り、間も無く睡りに就きたるやうなり
毒蛇の腮を脱れし思ひして玄焚はつと息を吐きしが、萬一ふ
たゞび害意を狭まむも知れねば、起て小聲に普門品を誦し觀
音菩薩を念じ居ける。夜も明けぬれば玄焚は何事も知らざり
し態にもてなして、胡人を喚び起し、合嗽手水をなし果て、

粗を喫して出立せんとするに、胡人は身をば動さで、此より
は路いよ／＼危く、水無く草無きところのみなり、唯五烽の
臺下に水はあれど其他に一滴あるところもなければ、是非と
も夜の暗きに乘じて烽下の水を偷まねばならず、水を偷みて
若し露れなば生命は無論あるべからず、されば危き目を見ん
より歸るの無事なるには若かじ、空に生命を失はむより法師
も故郷に歸り玉へ、と云へば玄焚聲を強め、昨日も云ひたる
通りなり、斷じて我は歸るまじ、疾く／＼行け、と嚴しく命
じて立ち出でけるが、胡人は切に家戀しくなりしか歸らんこ
とのみを云ひ、僅に五六里行きし頃立止まりて、我家の事も
氣遣はしく、又王法を破りての旅も今は爲し難ければ何卒暇
を賜はるべし、といふ。かくては止めたりとて役立つべくも
あらねば、さらば汝が望みに任せんとて彼に乘らせし馬を與

へ、袂を分ちて一人は西へと一人は東へと各自心に従ひ行きけるが、是より玄奘同伴も無く、子然として唯一人、見渡す限り茫々として限り知られぬ沙漠の中を覺束無くも辿り行きぬ。

其 四

雲漢々と蒼穹を填みて禽も鳴かざる荒涼たる沙漠の中に、唯一人地上に曳ける我影を伴侶となしつゝ行く淋しさ。我が故郷は山翠に水明らかなる邦なれば、岩が根を枕とし、草を席として寝るにも趣味ありて、旅の空にもまた自然ひとり慰む便の絶えて無きにはあらねど、此所は名に負ふ關外の大沙漠

のことなれば、滴るとき翠の色の常磐木も無く、花咲く木なんどは愈々さらにあるべくもなし。芳草萎く煙るが如き眺めも無ければ、鎌を腰にして牛の背に跨る牧童にも遇はず遠山霞むで漂沙たる景色もあらねば、紅葩花をつくる河洲の幽致も無く、唯見るところは黄沙の中に時々露はれ隠されたる旅客の不運に死せしもの、頭骨助骨等にて、遺恨の犯念のみなれば、身の毛も豎立つ心地して、我身も運の拙くば如是なるべしと思ひながら、一步と進み行く眼前に忽ち然裘駝を着けたる胡の軍士等の幾隊と無く馬に乗り連れ旌旗ふり閃かせるが現るゝことあり。これ破中の幻象にて、驚く間も無くまた消え去りて後にはたゞ黄沙あるのみ。玄奘疲れを堪へ忍びて八十里餘を經ける頃、第一の烽臺を見出したる彼所に水はあることと思へば、水の戀しさ堪へ難けれど、番

卒に見咎められなば生命の上と、沙の掘れたる溝様のところ
 に隠れ忍び居けるが、日は黄塵の立つ中に没れて、陰風吹き
 渡り、全く夜となりければ、闇に紛れて水を取らんと霧に臺
 下の水あるところに忍び入り、怖るく皮囊に水を盛り入る
 下時しもあれ、矢羽の風を截る音して一條の征箭堀と鳴り、
 殆んど隙に中らんとしければ、此は過ちたり、見咎められし
 歟残念なり、と思ふ間も無く、又一つの箭飛び來れば、所詮叶
 はぬことなりとも見露されし上からは尋常に我が西遊の趣旨
 をば述べし其上にて殺さるゝとも罰せらるゝともせられむも
 のを、と玄奘は、涙りに箭をば放つなかれ、我は佛衣を身に
 纏へる僧の身なるを粗忽すな、京師よりして來しものぞ、と
 大聲を擧げて叫びながら馬を牽きて逆ひ行けば、烽上の人も
 門を開きて出で來りぬ、番卒は恐るしげなる顔して玄奘を見

しが、全く僧に疑ひ無ければ、校尉の命を承けて後處置せん
 として奥に入りける。玄奘如何なることにならむと胸を隠
 らせ待つところへ、校尉の王祥といふもの動き出で、火を熱
 かしめて玄奘が様子伺ひ、此僧まことに京師の者なるべし
 河西の僧には似ざる態なり、と獨語し、如何に法師は何用あ
 りて關外に出で西蕃に行かむとするや、具に語れ、と糾しに
 かゝれば、玄奘今は少しも包まず、法を求めに印度へ行くよ
 し述べければ、涼州よりは唯玄奘が捕へられて東に還りしこ
 とばかりの通牒を得しのみにて、尙涼州を潜り抜け西に向つ
 て進めることを聞かざるまゝ、信する色はなかりしも、馬上
 の章疏名字などを示すに及びて信せしが、西路到底艱難にて
 首尾能く達し玉はむこと十の一にも望み無し、今我師には罪
 を與へじ、されど西遊せんことは必ずともに廢し玉へ、我は

熾煌の者なるが彼所に張峻法師といふがありて、能く賢を愛し徳を尙べば、師をば悪くは待遇ふまじき間、彼所へ送つてまゐらすべければ熾煌に到りたまふべし、と法師が願望をさへぎり止めぬ。されども法師は難きを避けず易きに就かず、己を養ひ利を圖るを目的となせるにあらざれば、我少きより道に志して兩京に名を得たる僧、吳蜀に雄を稱せし學匠、問ひ試みずといふこと無く、聊か名をも人に知られたれば名聞利養のためなんぞならば熾煌に行くまでも無く、又張峻といふ法師如何に碩學巨匠なるか知らねど、既に天下の名僧高徳を訪ひ盡せし我は訪はむとも欲せず、たゞ佛法尙盡く傳はらず、經に周からざるあり義に闕けたるあるを恨みて、求法の至誠を致し西域に到らんとするまでなれば、艱危はもとより期するところ、安逸は我が望みにあらず、誓つて恒河を渡り

慈嶽に上らでは歸らじ、と思ひ定めたるを、熾煌になど行けと云ひ玉ふは口惜しくも情なき仰せなり、我に情無からざる心を有ち玉は、願ましたて、勉めよ法師と云ひ玉は、むこそ難有けれ、ざるを退き挽むことを勤めらるゝは如何にぞや、互ひに大悲大慈の佛恩に絶りて淨土を欣び求むるものは、共に功德の種子を蒔きもし蒔かれもすべき理なれば、願はくば一時の慈悲を以て我を見免し、積年の我が望みを遂げしめ玉へ、不肖なれども玄奘は一箇の男兒、骨あり血あり、一箇の佛子信あり義あれば、心に背き誓を破りて一步なりとも東方に歸りは致すまじ、一步も東へ移しはせじ、と凜然として答へたるは、假令聞くもの石なりとも感動さすべき勢ひなりけり。流石に校尉王祥も道のため死を願みざる法師が勇壯殊勝なる態に憫むべきを覺えて、さても快きことを云ひ玉ふものかな、法

師は眞に佛法のため忠臣孝子なり、幸にして師の如き肉中に棲たる骨あり、血中に餓え立つ熱あり、信を守るに身を以てし、義を重んじて命に代ふる稀有の大人が稀有の大業のたゆまぬ此地に來玉ひしに値遇なせるは、我が一生の快事なり定めて疲れて居たまはんに兎も角もまづ休み玉へ、明くるを待つて前途のことも語りて聞かせ申さん、と云ひて與へと退きける。法師は大きに悦びて設け呉れたる鑑の上に夜をやすやすと睡りけるが、明くれば食事を読みし頃王祥從者に水を盛りたる囊と麥の餅とを持たしめ、自ら法師を送ること十里餘に及び、これにて御別れ申すべし、此地より直ちに第四烽に向つて走りつぎ玉は、師恐らくは無難ならむ、彼所には我が骨肉なる王伯隴といふ者ありて衛り居れるが、彼は心も朴直にて、費めんは如何のことなれと慈悲ある男のことなれば

我が斯く申せし言葉に就きて尋ね寄りしと云ひ玉は、必ず悪くは待遇ひ申すまじ、第二第三の烽、第五の烽の人々は何とも知れ難ければ構へて水を偷まむと近寄り玉ふこと勿れと、詳しく告ぐれば、玄奘いたく恩を謝して、再び一人となり、沙漠の中を進み行きける。憩ふ樹蔭も無き旅路に疲れ忽ち辛くも第四烽に到りしが、玄奘つくつく思ふやう此烽臺を成れるは彼親切なりし王祥が兄弟といへば、頼もしくも思はれるにあらざれば、人の心は親子とて兄弟姉妹なればとて面の如く異ふものなれば、役目を大切にして我を留めて處置を厳しくされむも知れず、假令委細を説き陳べて彼の心の解け和らぎ我を免して呉るにもせよ、無益の手数をかくるもうるさし、まして懸々此方より名乗りて出でし曉に、法を犯せる大膽者め、引續つて涼州に送らん、と云はれなば悔ゆとも及

ふべきにあらす、竊かに水を取りて去る方面倒無くて可かるべし、然せん然せん、と聞に乘じて水あるところに近づきしが、未だ水にも達せざる中、一筋の征矢飛び來りて危く身に中らんとしければ、認められし歟今は是非なし、と我は京師の僧玄奘と云ふものなり、矢をば放たす少時待て、衛戍の司長の王伯圃殿に云ふべきことあり、と忙しく云ひて、第一の烽に於けるが如き手續きをなし、王伯圃といへるに會ひ、王祥が言、我が身のこと、我が留められんことを恐れて竊かに水を取らむとせしことなどを具に陳辯しける。思ふには似ず伯圃といへるは祥の言葉の如く果して義に勇み人を愛する男にして、仔細を聞き終りし後、さては尋き僧にて居ませり、箭を飛ばせしは知らでせしことなれば無禮の罪は赦させ玉へ聞きも慣れざる健氣なる御思立をば如何で礙へん、必ず思ひ

累ひ玉ふな、今宵はゆるく休み玉へと、云ひて懇懇に待遇し呉れければ、なまじひ他の心を度りたる我が心の差かしきまで玄奘は悦びて、心置なく休みけるが、明れば主人大きな水を盛るべき皮囊と馬麥とを布施し、少時は送りて別るゝに臨み、我が師第五烽には向ひ玉ふな彼所を成れる者の性は粗暴しければ師を害めむかも測られず、此地を去ること百里ばかりに野馬泉といふがあれは、其所にて水を取り玉ふべし第五の烽に立寄らでも、野馬泉をさへ見出し玉はい水には不自由し玉はさらむ、といと懇に告げ呉れければ、玄奘すなはち恩を謝し別れを告げて、馬を急がせ立出でけるが、名に負ふ莫賀延磧のことなり、行けども行けども盡くること無し、昔時は沙河と呼ばれたる言語に絶えし荒地を辿るに、深山ならば海禽舷端を掠めて去

ることもあるべけれど、たゞ一面の平沙にて、深山大海より
 も寂しき長さ八百里餘のところを、憂さを語らむ友も無くて
 過ぐる悲しき云ふばかり無し。求法の大神を杖とし、英邁
 直往の氣を弓として、身をば飛空の箭となしつ、如何なる鐵
 をも如何なる岩をも貫かんと、意氣込にて、旅の衣に雪と積
 もる塵埃を拂ひ去りもせず、足は疲れ萎へて踏むに力無く、
 身の脂は汗と化して五體綿の如くなれど、睡を瞋み込みては
 西へ西へと二十里進み四十里進み、愛護の神力假し玉へと觀
 音菩薩を念じ祈り、或は一切苦厄を度する呪力無邊の大明呪
 を誦し、辛苦も能くく觀すれば有るべき理なし、と般若の
 妙理を腹に味ひ身に踐みて、又十里行き三十里行きしが、行
 くこと頓て百里に過ぎしと覺ゆれども、道を誤りたりしにや
 彼伯隴に教へられたる野馬泉といふ泉に遇はず。心いよく

驚き騒ぎながら注意して行けど、其かと思ゆる影も無きに、
 剩へ貯へ持てる水を飲まんとする機に囊の意外に重かりした
 め手を取り外して地に墜せしかば、生命と頼める水を失くし
 め。大切の行資を失ひし上、路は何方に取るべきやら毫も知
 れずなりしかば、流石大膽不敵なる玄奘なれども當惑なし、
 一先第四の烽に歸りて、水盛る囊に水を満たし、取るべき路を
 も能く聞き糺して、其後再び西に向はむと東の方に取つて返
 し、十里餘りも馬を行りしが、我最初には發願して、若し天
 竺に到らずば終に一步も東の方へ向つて歩むこと無からむと
 誓ひしに、假令ば水を失ひたりとて又道筋の知れずなりしと
 て東に歸ることやある、東に歸つて生きんより寧死すとも西
 路に就かむ、一眼にこそ其涯は見えぬ、沙漠とて決して限り
 無きにはあらず、懦弱の思ひに身を委ねて引返さんば勇無し

義無し、三世諸佛の冥覽したまはむはとも差かし、何を今さら死を畏れん、精神壯に自ら助けなば天もかならず見捨てたまはじ、然なり然なり、と獨り點頭き響を旋らし、親音菩薩も我が誠心を憐み玉へ、と默禱しつゝ西北さして進みけるが烈風時に吹き来れば、巻かれて躍り舞ふ砂は紛々として面を撲つこと、山廻りする村時雨の急に襲ふに異ならず、夜に入れば黒黠々たる中に怪しき鬼火燃えて、忽ち爛と輝くかとおもへば忽ち爛として盛火のどとく、必死と進み進みけるに二みしめて寸毫も怯れ萎むこと無く、必死と進み進みけるに二日を経れば水に遇はず、三日を経れば水に遇はず、四日を経れば猶も遇はねば、舌は乾きて焦ぐるが如く、身は衰へて骨立ちぬ。明日は或は水を見ることを得べしと空しく頼みて、黒煙出づる獄と疑ふばかりの息を吐き、

歩めど、第五日めも水に遇はねば、眼の動きも滯り来りて、生命は今や油盡きたる短業一點の燈火の如く、五日四晩に濁水も喉に通さず歩みたるに、馬も進まず人も堪らず、もはや絶體絶命なり。我大望を起したれど事成らずして沙漠の鬼と此所に化る歟、心外なり、幾干の艱難夜も来しも皆風前の虹と消えて、満腔の熱血いたづらに沙漠の碛上に乾き終らん無念さ遣根さ、天命ならば佛神を恨みたてまつらむやうも無ければ、大丈夫志を立て、遺恨千秋散じがたし、故郷の兄も玄奘を抱いて冥土に入る、遺恨千秋散じがたし、故郷の兄も玄奘の此所に枯骨と成り果てしとは、通ふ人無き沙河に終れば亡き後までも知り得玉はじ、嗚呼喚くとも甲斐無きことなり最期の覺悟にかゝるべし、と足折り伏して地に倒れたる馬の平頭かき撫でながら、老馬よ、汝も憐れ果てしか、今まで我

を助け呉れたる汝の恩をば忘れはせねば、萬一水にも遇ふこ
 とあらば我れよりは先づ汝に與らんと思ひ居りしも空願めとな
 り、汝も我れと共に此所に果敢なく死することとなりぬ、能
 く此處までは我れを載せて來り呉れしを、満足なり、我が大望
 に身を殉へし汝が恩は玄奘忘れじ、此後の世に會ふこともあ
 らば必ず厚く報ひん、玄奘ごときものを主人とせしを不運と
 謂めて此地にて死して呉れよかし、不幸のものよ、と少時は
 撫でつ摩りつ、いたはりしが、かくてあるべき時にあらねば
 玄奘沙中に端坐して觀音菩薩を心に念じ、玄奘が此旅行、財
 利を求めんためにもあらず、名譽を取らんためにもあらず、
 たゞ上も無き正法を求めんが爲來りしのみ、仰ぎ願はくば一
 切衆生の苦を救ふを務とせらるゝ慈悲無限の觀音菩薩、玄奘
 が微志を憐れみ助け玉ひて心願成就なさしめ玉へ、と探りか

へし練り返し眞心竭して祈り告げ入るが、すなはち第五の夜
 の眞夜中頃、何方より吹き來るとも知れず涼しき風の吹き來
 りぬ。其風今まで吹きし如き乾きもつたるものにはあらで、
 肌膚に觸るゝ其快さ、恰も大暑の折柄に清冷淨潔の水の中に
 入りて滿身の汗流れ去り忽ち熱を忘れしが如くなれば、馬も
 勢ひやゝ復し、玄奘もまた眩きたる眼さへ明らかになりける
 が、飽まで疲れ勞れし末に快を覺えしことなれば、睡るとは
 無く其まゝ睡りぬ。

其 五

假睡の夢の中に丈いと高き神將あらはれ、戟を執つて磨きて

何ゆる進までかゝるところに眠りを食ばり臥し居るや、疾く行けと大喝するに、玄奘驚き痛めて自ら怠りたるを慚ぢ、勇氣を鼓舞し立出づれば、馬も心を曉りしごとく、昨日には似ず足輕げに十里ばかりも進みけるが、不圖指す路を引違へて制し止むるをも聞かず馳すれば、玄奘も是非無く其の行くに任せて數里を過ぐるに、忽然として青草茂れるところ現はれ出でたり。嬉しや草のあるからには水もかならずあるなるべし、と馬より下りて腹飽くまで馬に草飼ひ、また進むに、錢のやうに澄み渡る一つの少なき池を見出しぬ、水を掬ひて先づ飲むに、五晝夜全く飲まざりしこと故甘さ例ふるに物無し、水を得草を得たりければ一日此所に休息して十分勇氣を回復なし、皮の袋に水を盛り、秣と共に馬背につけて、再び平沙の中を行きぬ。今度は水あり秣あれば、心強く

進みけるに、水も秣も盡さんとする第三日目に流沙を出で、漸やく伊吾國へ着きにければ、今は憂ふること無し、といよ、心強くなりて、漸々伊吾の國裏を歩み、とある一寺に宿りけるに、不思議なるかな中國の僧三人ありて出で來りけるが、中にも一人の老僧は衣に帶せず跣足にて周章ふためき立ち迎へ、法師を抱きて咽び泣き、到底ふたゝび故郷の人を見るには及ばしと思ひ居りしに、嬉しくも重ねて本土の人を見たり、と言葉もしどるに懐しさの情を陳ぶれば、玄奘も流沙を出で、初めて此地に故郷の人を見たる嬉しさに堪へず、互ひに手を取交し、關山萬里隔りし京師を共に思ひ忍びて泣き居けるところへ、伊吾の僧なども出來りぬ。伊吾國には、玄奘といふもの求法のためにとて長沙碛を渡りて此所に來り、猶西方に行かんとする由を傳へ聞き、深く賛歎して

厚く法師を供養しけるが、此事國中の取沙汰となりて到ると
ころに噂し合へる折しも、高昌國の王の使の此日還らむとな
し居けるもの、珍らしき者の見たさに玄奘を見て國に歸り、
王に委細を語りける。高昌王の趙文泰といへるは、心懸しか
らで、佛の道を奉せるものなりければ、自己が臣下が玄奘の
身の上を語るを聞き深く感じ、直に法師を送り越すべきや
う伊吾の王が許へ急使をもつて云ひこしけり。伊吾は高昌の
下風に立つ國なれば、趙文泰が言葉には背くあたはず。こと
さら玄奘を迎へんとて良馬を遣し來しなごしければ、可汗浮
圖の路を取つて進まんと思ひし玄奘も王の請を無下に斥け辭
まんやう無くて遂に其意に従ひ、南の方の沙磧を涉り、六日
を経て高昌國界の白方城といふに至りぬ。時に日も既暮れけ
れば、此の城中に停まらんとせしに、王は一刻千秋の思ひを

なして待ち居玉ふに王城もまた此城より然まで遠くはあらざ
れば定めし疲れて坐さんか是非に王城まで行かれむことを我
々願ひ申すなりと、使者をはじめ官人共の異口同音に云へば
玄奘是非なく意に従ひける。役人どもは道を急がんとて數々
法師が馬を換へ、揉みに揉んで行くほどに、鶏の鳴く頃王城
に着けば、王はそれと聞き急に勅を下し、城門を八字に開
かせたり。侍臣が列ねし燭の光り煌々として四邊も眩き中を
玄奘すつと通れば、王は宮中より出でいと懇懇に迎へ入れ
法師を導いて後院の一重閣の寶帳の中に坐せしめ、恭しく禮
拜なせし後徐に、弟子師が名を聞きしより打喜びて寢食を忘
れしが、道程のほどを推測りて今夜は必ず着き玉はむと妻子
と共に皆未だ眠りにつかは致さずして、靜に經文をば讀誦な
し、敬んで御待ち申したるに、能くこそ通々來玉ひつれ、と

悦びを陳べ情を明かして、又他事も無く款待しけるが、願て
王妃も數十の侍女にかしづかれながら入り來りて、皆一齊に
禮拜なしける、夜もや、曉くるに近くなりければ王も王妃も
明日を契りて玄奘に別れ、宮中の役人に解怠なく玄奘法師の
ため心に用うべしと厳しく命じて宮に歸りぬ。

其六

朝いと早く玄奘が未だ起き出でざるに先だち、賢を向ふ心深
き高昌王は王妃以下を率ゐて法師を禮問し、法師が涼州瓜州
に危きを免れしこと、烽下の飛箭に命も失ふべかりしこと、
沙磧の中に死に垂とせしことなど、一々聞き得てますます驚

嘆し、弟子思ふに砂漠の中如何に艱難し玉ひけん、察するだ
にも傷はし、然るに事無くたい一人にて過ぎ來玉ひしは佛
天の冥助も師が身に在る歎とおぼえて尋さ真に云ふべき言葉
を知らず、と涙を流して稱歎しけるが、美を盛したる食を備
めて、食終りし後宮側に別に建てたる道場へ法師を引て之に
居らしめ、侍者をして鄭重に衛らしめける、此高昌に家法師
といふものあり、曾て長安に遊學せしものにて善く法相の義
に通じ居けるが、王はこれをお召し出して法師に見えし
めなごなし、また國統の王法師といへる八十餘りの老僧を法
師と共に居らしめて、法師に長く高昌に住して西方へ行くと
と勿れと何かにつけて諭させけり、されども玄奘は西天に去
らん心の切なれば何とて言葉を取り入るべき、王の厚意の民
し難きに十日餘りも停まりしか、遂に暇を乞ひて去らんとす

れば、己に老法師をして請ふところあらしめしが師の御意は如何にぞや、願はくば此地に止まり玉へ、と王は引止めにかゝりぬ。此はまた處置し難きことかな、如何になさん、と玄奘少時打案せしが、他に答ふべき辭も無ければ、留め玉ふはあり難き王の高恩にはあれど、此所まで來りし心に背くこと返して、朕先王と大國に遊びし時、隋の帝に從ひて東西二京は云ふに及ばず、燕代汾晋の間をも經歷し、多く名僧智識を見しが、慕ふところも無くして止みぬ、然るに過日法師の名を耳にせしより景慕の念止みがたく、又幸ひに斯く値遇せしより、身心歡喜し、束の間も法師をあたに思ふこと無し、師願はくば止まりて一生を弟子の供養に終へ玉へ、一國の人を皆盡く師の御弟子ともならしめん、數千の僧徒を皆盡く師の講

述説法を聞くものともならしめん、何卒微心の誠を昭らして西遊の念を翻へし玉はれ、と云ふ、法師ははとく困せしが王の厚情貧道如き冥徳の者の當りがたきところにはあれど、但此旅行供養のためせしにあらす、本國の法義いまだ周からず經律もまた闕少せるがため、疑或は解けて從ふべきところを知らざるを悲み、西方に未だ聞かざるの旨を請ひ聞きて方等の甘露を迦毘羅の城下に灑がしむるのみならず決擇の微言を東國に流布せしめんとおもへばなり、願はくは王意を收めて思ふところを果さしめ玉へ、と云へば、王は又弟子法師を仰ぎ慕ひて是非に供養したてまつらんとおもふ、葱山は轉ばすべきも、此心は轉ぶこと、無し乞ふらくは愚誠を信じて疑ひたまふなかれ、といふ推せば返し、辭めば求めて、問答さらに限りなければ、玄奘少しく論歩を進めて、王の情深

き御心は數次言ひたまふを待たでも明かに心得居りて、淺か
らぬ御恩恵を謝するに言葉も無し、たい玄奘の西に來りしは
全く法のためなれば、法をも未だ得ざるにあたりて中途に止
まるべきやうなし、此道理を以て敬慎んで御暇乞申すなり、
大王人の主たる上は、蒼生の仰ぎ待みたてまつるのみならず
教法もまた依り憑み奉るところなれば、管に蒼生を撫育し玉
ふのみならず、教法をもまた愛護し玉ふべし、まして大王は
佛を尊み法を重んぜらるれば、理としても貧道が西遊求法の
微志を助け成し玉はるべきに、引留め玉ふは御厚情過ぎて却
つて悲しく存じ奉る、と道理を盡して陳べにける。王は頷に
手を加へて、弟子も敢て師の行を障へ禁めんとにはあらねど
我が國に好き導師も無ければ、法師を屈して國の師となし、
愚迷を導き群生を利せむことをば懇望するのみ、我蒼生をも

愛育し、佛法をもまた尊信すれば、即ちいよく法師を放ち
て道路も危ふき西方に行かしめ難き心ぞする、願はくは我が
真心を憐れみ玉ひて我が乞ひを姑く許したまへ、と身の尊き
を打忘れて他事なく云へば玄奘は益々辭するに苦しみけるが
断然として王の乞ひには應じ難しと云ひ放ちける。賢を向ふ
心篤さに我が一國の至尊なる身をもて他邦の一僧徒に今まで
首を下げし王も此時に至りて面の色を變じ、袂を攘つて二三歩
退き、玄奘法師よく聞き玉へ、弟子徳足らず才鈍くして、師
を留むることあたはずとも、かりそめながら弟子もまた高昌
一國の主として聊か勢力無きにあらず、弟子萬一異志を懷か
ば師いかに能く自ら去り得ん、或は師をば師の本國に送り
還すか、或はまた長らく此地に止めんか、皆我が心の中にあ
り、我が師みづから思ひたまへ、我が言葉に就き玉ふこと却

つて貴體のためなるべし、と恐ろしきことを云ひ出しぬ。玄奘は、今やむを得ず不屈不撓の精神を一毫つゝも暴露なして、今王のたれ障へらるとも、只此骨は留めらるべし、此精神は止められじ、と慨然として歎息し、思ひに逼り咽び泣きて復びものをも得云はざりける。王は玄奘法師が此際乎として動かざる體を見るより強ひざりしが、景慕の念をいよく深めて、これよりはまた留めんとも云ふことなくして、唯自らすらに禮を厚くし供養を増加し、毎日食を進むるにも王自ら槃を捧げ茶を供するに至りければ、玄奘心苦し云はん方無ければ、逃げ出さんには守衛ありて、宮門幾重厳重なり、辭せむとすれば許されず、また如何ともせん術無さま、遂に國王が供養を受けざることを誓ひて、自ら食を断らたりける。

王は自ら槃を奉じて例の如くに食をすゝむるに玄奘が端坐無言にして食をなさいることを怪み、さまざま勸はり慰めけるが、法師は遂に眼をも動さざれば是非なく退きしが、尙も珍味を盡したる膳部をとゝのへ備めける。されども玄奘胸の中には、王の心の一轉して我が西遊を許すやうにならざる中、決して王の供養を取らじ、我が断食の日數積らば、生を求めず死を恐れざる我が精神に感動して或は許さむ歟も知れず、また王の意の堅くして我身の脆く斃るゝとも是非無きことと、諦むべし、心に背きて生きんより死するがまだしも増しならむ、王の意堅さか、我が意勝つ歟、生命を賭て争はんとは齒を咬みしめつ坐を端しくしつ、此所一寸も心身に動くまじとぞ構へける。其翌日も食を取らず、又其翌日も食すること無く、三日といふもの一滴の水をも咽喉に通さたりければ

眼は凹み、小鼻は肉落ち、氣息も微弱くなりたりけるを、第四日に至りては王も流石に見るに堪へず、稽首して、師よ我が罪を許し給へ、師の西行を障へしは我が過ちなり、今留めじ、師の御心に任さむはどに願はくば我が供養を納め玉へ、と云ひ出しぬ。玄奘は尙王の心の底を測りかね、或は如是云ひて食をなさしめし後また引留めんとする所存にあらずや、と疑へば、日を指して其言葉の虚偽ならざる誓を立て玉はるべし、と王に求めけるに、王は然らば佛前にて我が誠を張太如の前にて法師と義を結びて兄弟となり、かくなる上は師が思ふまゝ西域に入りて法を求めたまはむを助けこそせめ拒みはなさじ、たい願はくは還り玉ふ日、此高昌に三年が間は止まりて我が供養を受け玉へ、師若し成道の大果を得たま

はむには、微力を盡して我師のため、釋迦佛に於ける類は、婆羅王波斯匿王の如くなるべし、よつて今より猶一月はとまり玉ひて、仁王般若經を講じ玉はらば、千萬嬉しく存すべし、且又其間に旅中の御衣などを密に造りてまゐらせんとすれば此乞を偏に許し玉へ、と飽まで親切鄭重なるに、法師も辭すべきやうなれば、一々承諾なせしもの、方に僅に食を取らぬ。これより王は大なる帳を張らせて母后を始め大臣等と共に毎日經を講ずるを聞きけるが、講の始まる度に日に王みづから手に香爐を執りて法師を一々立迎へける。日此の如くして滿講の日に至りければ、法師のため四沙彌を度して給侍に充て、法服三十具を贈り、西土極めて寒ければとて、面を蔽ひ隠すもの、手足を包み護るものをも贈り、法師が二十年ほどの間を支ゆべき料にと黄金一百兩銀錢三萬



絹五百疋をも贈り、馬三十疋介添人二十五人をも道中のため
 にとて贈りし上、殿侍御史に法師を送つて葉護可汗の術に至
 るべしと命じ、また二十四の封書を作りて一封ごとに大綾一
 疋を信しとして添へ、屈支國等の二十四國に法師が上を頼み
 聞え、西番諸國の盟主たる葉護可汗には綾絹五百疋、果實二
 車に、法師は我が弟なるが法を西天に求めんとて貴國を過ぐ
 るものなるにつき願はくは可汗法師を憐むこと我を憐むこと
 くし玉へ、と書きたる書をば添へたりける、我には實に法師
 がため障礙をなせし高昌王が翻りて此優渥なる餞をなし呉れ
 たるに、玄奘再び驚き悦び、書を上りて恩を謝しけるが、法
 師既に我と兄弟たることを許されし上は、我が家のものは皆
 師と共に同く有するところなるに謝するよことのある理なし
 と王は深くも答へける、いよく玄奘出立の日ともなれば、



王は大^お臣^{しん}百^{ひゃく}官^{くわん}等^らと共^{とも}に滿^{まん}都^との士^し女^{にょ}を傾^{かたむ}け盡^{つく}して城^{じやう}西^{せい}に送^{おく}り出^いで、王^{わう}妃^ひと臣^{しん}等^らを還^{かへ}らしめし後^{のち}、尙^{じやう}自^じら僧^{そう}等^らと馬^まに跨^{また}り、數^{かず}十里^{じゆり}を送^{おく}り、法^{ほふ}師^しを抱^{かか}りて、樹^{じゆ}哭^なせしが、涙^{なみだ}の眼^{まなこ}にて見^み送^{おく}りつ、
 また見^み返^{かへ}りつ、求^{もと}法^{ほふ}の高^{たか}僧^{そう}、護^ご法^{ほふ}の賢^{けん}王^{わう}、二^{ふた}人^{にん}は別^{わか}れ別^{わか}れとな^りける。

其 七

留^{とど}むるにもまた切^きなれば送^{おく}るにもまた心^{こころ}厚^{あつ}き高^{たか}昌^{しやう}王^{わう}に保^{たも}護^ごを
 得^えて、玄^{げん}奘^{ざう}大^{だい}き^きに悦^{よろこ}び勇^{ゆう}み、次^{つぎ}第^{だい}々^々に西^{せい}へ進^{すす}みて、無^む半^{はん}城^{じやう}
 篤^{とく}進^{しん}城^{じやう}なといへるを過^すぎ、阿^あ耆^し尼^に國^{こく}に入^いり、銀^{ぎん}山^{さん}を越^こえ、阿^あ
 耆^し尼^にの王^{わう}都^とに近^{ちか}づさしが、此^{こゝ}國^{こく}先^まきに高^{たか}昌^{しやう}國^{こく}に攻^せめ撃^つたれし

恨のあれば、國王はじめ大臣等も出迎ひはしたれ共馬を給す
 るをせす。玄奘すなはち一宿して、平川を渡り數百里行き
 て、屈支國へ入りたりける。屈支の王は高昌より通牒に
 よりて諸臣及び木叉多といへる僧等と共に法師を迎へ受け
 待遇いと懇懃なり。極多といへるは二十餘年印度に遊びて學
 を成し、此地に歸りしものよしにて、屈支一國第一と尊敬
 さるゝ僧なるが、法師に對ひて、此國に俱舍論毘婆沙論等の
 諸部具はりて闕くることなれば遙々印度に行くには及ばじ
 此所にといまり學び玉へ、といふに、法師は瑜珈論ありやと
 問ひ試むれば、彼書の如き邪見の論を學ばんとすることなか
 れ、と事も無げにぞ答へける。法師これまで極多をば尋び敬
 ひ居たりけるが、此語を聞くより極多の道底を破りて
 竊に疎んじ、瑜珈を邪見の書と云ひ玉ふは恐ろしき誇法の罪

を免れ玉はじ、されども其は争ふまでなし、毘婆沙俱舍等は
 我が本國にも傳はりあれば既に解せり、試みに問ひ申さんと
 て、一二ヶ所を指して極多に問ひしに、極多は法師に敵しが
 たく、我老耄せりと稱して避けよる。此時恰も天寒くして凌
 山の雪解けやらす、道路塞がりて行くを得ざれば六十餘日と
 いまりけるが、道通するに至りし日、すなはち玄奘發足しけ
 るを王は自ら送りし上、人足駝馬等を給はりけるにぞ、法師
 は恩を謝して別れ、道を急ぎて前み行き、二日ゆには突厥の
 賊に遇ひしも無事にして、六百里を過ぎ、小さき沙磧を渡り
 て、跋祿迦國に入り、それより西北に向ひ行くこと三百里に
 して、一嶺を越え、凌山に至りける、此凌山といへるは即ち支
 那と印度との間に踏まれる大葱嶺の山脈の北の隅なる山にし
 て、山路ははしく恐ろしく、望は萬仞萬仞、天に接る高山

にて、千古消えざる氷雪は、積りて凌層を成し、春にも
 解けず夏にも融けず、凝五汗浸密雲と相連りたる其風情、物
 凄しなるといふも愚に、一望自然際涯を知らず、其氷塊の擡け
 落ちて路の側に横はり又は道を塞ぐもの或ひは廣さ數丈なれ
 ば或は高さ百尺餘なり、玄奘等が一行は漸々山に上るは必に
 崎嶇たる路は足を疲らし、瞬瞬たる崖は心を驚かすのみなら
 ず、烈風怒號しては呼吸を奪ひ、飛雪亂下しては眼を掠むれ
 ば、人皆我にもあらずなり行きける。日本内地の山の如く七
 里八里の上下ならねば、雪に臥し氷に宿ること七日にして、
 方に始めて山を出でしが、其間に凍へ死せるもの十に三四、
 牛馬は十に四五もありける、かくて辛くも凌山を逾え、其水
 熱しといふにはあらねど僅に凍らざるをもて、凌山に對して
 熱海といふ名を得たる周圍一千四五百里の大池を見るに至り

しかば、池に添ひて西北に行くこと五百餘里に及びしに、
 ならずも彼突厥の葉護可汗が狩りして遊び居けるに遇ひぬ。可
 汗は身には緑色なる綾の袍を着、辮髪にして、いづれも錦の
 袍を着け、辮髪にせる官人等二百餘人を引從へ、其他士卒等
 の數限り無きに取り圍まれ、威儀堂々と野を行きけるが、法
 師と相見て打悦び、我は此より二三日して城に歸るべければ
 法師は先きに彼所に到り、我が歸着をば待ち居たまへ、と云
 ひて一人の官人に玄奘を守護させ素葉城へと送らせける。法
 師は城に至りし後三日はを待ち居けるが、果して可汗歸り來
 りて、法師を召せば法師は即ち入り見ゆるに、金花をもつて
 装飾し見ゆる目眩く帳中に可汗は控へ、諸臣等は皆錦服に
 て兩行に居流れたるさま壯麗なり、法師帳を去ること三十歩
 あまりなるところに至れば、可汗自ら出で迎へて勞を憐ひ問

ひ慰めぬ。法師は高昌國使をして彼王の書と信物等を可汗に
一々獻せしむれば、可汗は大きに悦びて、使者をも坐せしめ
優渥なる語を下し、憐ひしが、そもく突厥可汗といへるは、
雪山以北六十餘國を統べ居るところの大勢力あるものなれば、
法師の路次の安危とも可汗が一言一句にて何ともなるべきも
の故に、高昌王の深く計りて特に禮を厚くし幣を盛んにして
其歡心を求めしなり。さるに可汗の悦びたるさま言語舉動に
あらはれければ、法師も大きに安堵なして心ひそかに悦びけり
可汗は大いに宴を張り樂を奏して法師を饗應し、説法などを
請ひし後、軍卒中に漢語及び諸國の語に通せるものを選び求
めて法師に従はしめ、緋の綾の法服一襲、絹五十疋を布施な
し、群臣をして十里餘も送らしめける。法師はこれにますま
す勇みて西行することまた五百五十里、咀羅斯城といふに至

り、西南に向ひて行く四百里の間に、白水城恭御城を過ぎ、
或は南し或は西して、千里以上を経る途中、彼赤建國、結時
國、峯堵利瑟那國を過ぎ、又西北に路を取りて大沙碛を越え
五百餘里を歩みて、颯秣建國に至り、又西すること千五百里、
屈霜彌迦國、喝捍國、捕喝國、伐地國、貨利習彌伽國等を経
つ、西南に向つて三百里、屈霜那國にいたりぬ。こゝより又
西南に行くこと二百里にして、山中に入り險阻を攀ぢて山路
を辿ること三百里にして、高き鐵門に達しけるが、門は即ち
突厥の關塞にして左右の壁の壁立せる中の岩間に門ありて、
鐵鈴門扉の上に掛れり。まことに一夫道を塞がば萬卒もまた
進み難かるべき天然の關門にして、右も左りも時てる巖は雲
に入るごとく、線より猶細き路の纒に通せるばかりなり。此
所をば鐵門と呼ぶは、其右左の巖の色黒みを含みて、鐵礦の

ある故なりとぞ。法師此處をも打過ぎて、親貨羅國に至り、又それより活國に行きけるが、此國王は葉護可汗の長子の咀度といふものにて、高昌王の妹嫁なれば、我が病差ゆるを得ば自ら見て、折節恰も病にか入り居しも、我が病差ゆるを得ば自ら法師を送り申して婆羅門國に到らんと、いと頼母しげに云ひ聞きける。玄奘これに力を得て姑く逗留なし居ける中、内亂起りて王は毒殺され、新に王の立ければ、久しく還まらむも益無きことなりと又出立して提謂、波利の二城を過けるが、此間磔迦國の般若羅といへる僧に就いて小乗教の精義を學びぬ。般若羅といへる僧は學識高くして其名印度に聞えたるものなるが、縛喝國の聖跡を拜せんとして此地に來りし者なれば玄奘すなはら般若羅の歸ると共に揭職國に入り、昔に聞えし大雪山にか入りけるに、梵衍那國にいたるまで六百

里の間の辛苦、彼沙漠をば除えしにも勝りて、厨水峨々飛雪千里と往時の人の云ひけむも虚誕ならざる大山脈に行き惱みては、幾度か涙を拂ひ心を勵ましけるが、遂に事無く踏み越えて梵衍那國に入りたりける。これより迦畢試國に至りて般若羅と別れ、六百餘里を経て蓋波國といへるに着きぬ。此國印度の北境にて此地よりは早佛國に程遠からで其間に峻山沙磧の恐るべきも多きはあらねば玄奘悦び、靈跡等を巡拜なしして健陀邏國に至りけるが、此國は印度の諸賢人無著菩薩親菩薩を初めとして法教如意等の出でしところにて靈跡もまた少からねば一々巡拜なしたりける。斯て烏仗那國、咀叉始羅國、僧訶補羅國、烏刺叉國を経て迦濕彌羅國に至りけるが國王玄奘の如何なる人にて如何なる志望を抱きて來りしといふことを知りしかば、群臣及び僧侶等を引卒へて玄奘が宿れ

神祕の理を極めけるにぞ、師は感歎して、此脂那の僧智力拔
 京賦の勝れし上、一念確固と勵むとゆゑ、師をも驚かすまで幽玄
 を超え來りし事なれば、夜を日に續ぎて出精するに、素より
 まり來る者數を知らず、玄奘は殊更に故郷を捨て、沙磧雪嶺
 聲明論を講じ、午より巳後は順正理論を講じ、初夜より後は因明
 論を講じ、午より巳後は順正理論を講じ、初夜より後は因明
 が遙々來つる志を愛し力を盡して教へ授け、晝より前は俱舍
 論を講じ、午より巳後は順正理論を講じ、初夜より後は因明
 ば、玄奘己を低くして心を傾け問ひ學びけるに、法師も玄奘
 潔に、理を尋ねること深く遠く、多聞聰持の大學者なりけれ
 へるは年七十を過ぎて氣力已に衰へたれど、戒を保つこと淳
 養などしつ恭敬すること大方ならず、時に此邦の稱法師とい
 中の壯宏なる寺院に導き入れ、其翌日は王宮に請じ入れて供
 るところに来り法師を引かせ來りし大衆に請じ乘せて都城の

群なり、おもふに衆徒の中此僧の右に出づるものなからむと
 稱しける。此こと早くも前々より從學したる僧等の耳に入り
 たりければ、衆徒の中にも勝れたる大乘部の僧毘成陀僧訶、
 長那飯茶、薩婆多部の學僧蘇伽密多羅、婆蘇蜜多羅、僧祇部
 の學僧蘇利耶提婆、長那咀羅多などいへる一人當千の者ども
 己が師の外國の者を褒むるを聞きて心安からず思ひ憤を發し
 て講論の次に玄奘を難詰せざることを無けれど、玄奘釋の應ず
 るごとく問に應じて滔々と義を拆ち理を陳べて滯はること無
 ければ、僧等も遂にほ慙ぢ服して及び難しと稱揚しける。是
 の如くして此邦に留まること首尾二年に及びける其間經論を
 學び聖跡を拜し了りければ、西南に行くと七百里にして半
 皎嗟國に至り、七百里を南に行き磔迦國に至りける。遇馬闍補羅
 國に至り、七百餘里を行き磔迦國に至りける。遇馬闍補羅國

肉を犠牲となし福を祈るを今まで例とし來れる者なりけ
 も預て事へ、秋ごとく委形端しき人を免めては斫り殺して血を
 奪ひ財を奪ひ取りけるが、此盜賊等は突伽天といへる魔神に
 云はぬばかりに悠々として船を擁して岸に向ひ、船客の衣を
 らまらふ立ち河に落ち込ひものさへあり、賊は左も右もこそと
 餘艘の賊船一時に現はれ、總拍子取つて向ひ來れば、船中た
 餘にして、阿蘭迦樹の蔭暗もまで茂りあへる左右の岸より十
 折しも同船のもの八十人餘もありけるが、船の行く事百里
 國に至らんと河を船にて下りけるに、不思議の災難起りたり
 他國、羯若鞠闍國等一々巡覽して阿蘭陀國に至り、阿耶穆法
 ぶに我やし婆羅吸摩補羅國、薩犁但羅國、毘羅那國、劫比
 底補羅國に至りて半春一夏を蜜多斯那といふ者に辨眞論を學
 徳多に就きて經部毘婆沙を聴き終る間一冬半春を過さし、秣
 羅國に就きて經部毘婆沙を聴き終る間一冬半春を過さし、秣

を出で、礫迦國に到る途中盜賊に遇ひて、衣服をはじめ旅荷
 物を皆奪られしが、玄奘は生命を奪られざりしを脱ぶのみに
 て、衣資を失ひしを心ともせざりければ、人いづれも其胸の
 中の清きこと水のごとくにして之を渾らせども濁らざるに威
 じける。礫迦國に長壽の外道ありて、中論百論等に明らかに
 吠陀等の書に善く通じたりければ、道のためには外道に屈す
 ることを忍びて一月ばかりも從ひ學び、百論廣百論の理義
 を歸らめけるが、東行すること五百餘里にして那僕底國に至
 り、毘膩多鉢臘婆といへる大徳に會ふに及びては、十四ヶ月
 も住まりて對法論顯宗論門論を學びける。それよりまた闍
 爛達那國に四ヶ月も停まりて旃達羅伐摩に從ひ衆事分毘婆
 を學び、屈露多國、設多國、廣國、波理夜阻羅國、秣羅國、
 薩他尼濕代羅國、祿勒那國等を經歷し、祿勒那國の大徳闍那



れば、玄奘の形端しく麗はしきを見て互ひに點頭あひ、秋に
 向ひて此法師を得しは實に吉祥なり、いでく殺して祭祠に
 用ひんと罵り叫びぬ。法師は大きに驚き迷ひ、よしなきこと
 を云はるゝものかな、我身を以て祭祠の用に充てんとせらる
 るに身を惜むにはあらざれど者闍屈山に至りて禮拜し、并び
 に經法を請ひ求めんとする我身の、此心をも遂げさすことな
 く殺し玉ふは吉祥ならじ、と云へど無慈悲の賊なれば、首肯
 ふ色も更に無し。同船したる者の中には、預て法師の名を聞
 きて尊信なせる者もありて、我身財産を取られし上は生きて
 甲斐無し、願はくは法師を助け、其代りに我をば用ひ玉へと
 云ひなぞするもありけるが、賊は何條許すべき、岸に上りて
 花林の中を消むるものあり土壇を設くるもあれば、刀を抜きて
 今や斫らんと二々揮り三揮り揮り試むるもあれば、玄奘是非

なく賊に對ひて、少時我に遇るなかれ、到底助かるべき身な
らねば唯我をして安らかに終を遂げしめよ、とて端坐合掌な
しぬ。思へば思へば口惜きかな、千辛萬酸を経て年來の望み
漸く達せむとするの緒を得たるに、心無き盜賊等が慘き及の
露と消えて、沙磧の風に惱み、雪山の水に苦めるも無益の勞
となり、禮拜の志、求法流通の願ひもこゝに遂げ得で終らん
こと、我が福薄く運拙き故とは云へ、悲しき口惜し忘れが
たし、仰ぎ願はくは彌勒菩薩、我を親史多の天宮に引取り玉
ひて、我が一念を預て懸けたる瑜珈師地論を受けしめ玉へ、
妙法を聴き智慧成就せば、下界に下りて初念の如く此土の人
を誓つて善に導き進めむ、殊更には今追害を我に加ふる此等
の人は、踏むべき路を迷ひ誤りたる者にして、頓て苦しき報
を受けむ憫然さ實に云ふに堪へたれば、まづ此等をば教化し

て正路に復り善果を得せしめむと最期に臨みても猶屈せず挽
ます黙禱して、寂然と心を静め居たりける。同船の人々も性
は善なるものなれば、今玄奘が殊勝なる望みを齎し、外國よ
り遠く來つるに空しく賊手に斃れむとする穢を見て聲を擧げ
て泣き叫びけるが、不思議なるかな黒風忽ち驟々として吹き
來り樹木を折り奪り沙石を飛ばせば、河浪俄に立ち騒ぎ、乘
り捨てたりし賊船は木葉の如く漂ひて、或は覆へり或は碎け
去るもあり、此光景は賊は驚き、若くは罪なき僧を屠らんと
せし故にはあらざるべきかと、惡事をなせるもの心は迷ひ
易くて、内心急に懼怖をなし、法師は元來何者ぞ、と問ふに
玄奘は頭を掻けて、我は遙に支那國より法を求めに來しもの
なり、と一部始終を匿さず語りぬ。盜賊共はこゝにいよく
急風天より下し來しは如是尋き人を及にかげんとせし故神明

の怒らせ玉ひしものならむ、と思ひ定めて大きに怖れ、地に
 平伏して、免し玉へ敢て法師を害はむとはせじ、願はくば我
 が懺悔を受け玉へ、今より心を翻へして復悪念を起すまじ免
 し玉へ免し玉へ、と涙を流して罪を謝しければ、玄奘乃ち道
 理を説き、朝露よりも脆き身をもて長き苦痛を心に受くる作
 悪の業愚にまた淺ましきをいと懇に教へ示しけるに、賊は全
 く悔悟なして、人を脅すために持ちたる五戒を受け退きける。
 込み、奪りたるものを主にかへし、五戒を受け退きける。
 船を同じくしたりし者等も此状態に且は歡び且は感じて、各
 自志すかたに去りけるが、此事口より耳に、耳より口に流れ
 傳はりて、聞くもの感ぜざるは無し。さて玄奘は恙無く阿耶
 穆法に至り、聞くもの感ぜざるは無し。さて玄奘は恙無く阿耶
 釋迦佛降生せしところの古跡を迦毘羅伐率堵國に拜し、藍摩

其 八

國より拘尸那揭羅國に至りて佛涅槃に入り玉ひしところを拜
 し、婆羅痾斯國主國吠舍釐國を経て摩揭陀國に至りけるが
 此邊靈跡極めて多ければ、一々巡拜しける程に多く日數を費し
 ける。

昔時釋迦佛在世の頃般若法華等の大法を説かれたる結栗陀羅
 矩陀山即ち訛りて耆闍崛山と云ひならはしたる山に詣づるに
 岡陵連なり立てるが中に一層抜け出て高き峰あり、形は恰も
 鷲鳥のごとくなれば、靈鷲山と義解して呼べるも無理ならず思
 はれ、玄奘暫時は慨然として古今の感に堪へざりしが、泣拜



して退きし後那爛多^{ナラト}大寺^{ダイジ}に着きて初めて尸羅跋陀^{シラバト}大師^{ダイシ}に見えぬ。そもく^ク那爛多^{ナラト}大寺^{ダイジ}といへるは摩訶陀^{マカト}國^{クニ}第一^{ダイイチ}とも五天竺^{イツテン}第一^{ダイイチ}とも云ひつべき大伽藍^{ダイカラン}にして、地^チは本巷^{ホンキョウ}後羅長者^{ゴラチョウ}の花園^{カノエン}なりしを、五百^{イハヒト}の商人^{シヤニン}資^シを合せ、十億^{ジュウイッパク}の金錢^{キンゲン}をもて買ひ求めて佛に獻^{マク}りしところなるが、此國^{ココク}の先王^{センオウ}鑠迦羅阿迭多^{シヤカラアテタ}王^{オウ}を始^{ハジ}めとして六代^{ロクダイ}の王^{オウ}絶^{ツツ}ゆるること無く、營^{エイ}造^{ゾウ}を此^{ココ}故^コ跡^{セキ}になしたるなれば、障壁^{シヤウヘキ}遠^{トウ}く繞^{ニウ}りて城^{シヤウ}の如^ニく大^{ダイ}に、中^{ナカ}は八^{ハチ}つの伽藍^{カラン}に分^{ワケ}れ寶臺^{ホウダイ}は星^{シヤウ}の如^ニく列^{レツ}り、理樓^{リロウ}は岳^{ガク}の如^ニく時^{トキ}ち、覺^{カク}は雲^{ウン}に聳^{ソウ}え軒^{ケン}端^{タン}は霞^{カサ}に單^{サン}められて、莊嚴^{シヤウエン}實^{ジツ}に云^{イハ}ふばかりなく、池^チには大^{ダイ}なること車蓋^{シャガイ}の如^ニく連^{レン}花^カ亭^{テイ}々^々として綠水^{リョクスイ}の透^{トウ}進^{シン}たるが中に開^{ヒラ}き、僧房^{ソウボウ}の間^マには迦尼花樹^{カニカノ}美^ミしく輝^ヒき、外^{ガイ}國^{クニ}には菴羅樹^{アンラノ}立^タせる様^{サマ}、見^ミる眼^{ガン}の塵^{チン}も洗^{セン}はるゝ心地^{ココチ}す。此^{ココ}中^{ナカ}にある僧徒^{ソウト}等の數^{スウ}常に一萬人^{イツマンニン}に越^コえて、孰^{ナク}も大乘^{ダイジョウ}の佛法^{ブツポフ}を學^{マカ}び、十八部^{ジッパツブ}を

兼ね、俗典吠陀等因明聲明醫方等をも研究討尋怠ると無く、寸陰を惜みあひて殿廡に修業し居れり。尸羅跋陀大師は即ち此の那爛陀大寺の總長にして、學業高く衆に拔け出で、芳名五天に雷の如く轟ける智徳兼備の老和尚なり。玄奘印度に入りてより此國此寺に此人ありて、大乘甚深の理に達し、佛法の蘊奧究めざることを無し、といふことを聞き、此人によりて瑜珈地師論をも學び受け、年來抱ける疑義をも問ひ定めんと思ひしことなれば、印度の禮義に従ひていと恭しく膝行なし、禮拜眞に至誠を盡しぬ。尸羅跋陀大師は中央に坐し、佛陀跋陀羅といへる七十歳餘りの學頭は其傍に扣へ、其餘の弟子は二列になりて、威儀整々と扣へり。大講堂の中座一つ躍らざるごとく靜にして、微風の送る花の香薫じ、何となく心も清淨なるを覺ゆるまで快し。爾時尸羅跋陀口を開き、法師

は何處より來りしか、また何のたれ來りしか、詳しく述べてと命すれば、玄奘謹みて、我は東方支那國の者にて、瑜珈師地論を求めむがため千辛萬苦を犯し此地まで参りたり、願はくは師我が心を憐み玉ひて瑜珈を授け、兼ては佛法の諸の疑惑を解き示し玉へ、と答へけるに、尸羅跋陀悦こふこと限り無く、よく遙々と尋ね來つるよ、汝が求法の心厚きは我が道のため佛のためいと悦ぶべく愛すべし、我今年は百六歳、輪も既に傾きて甲斐無く頓て終らんとするに臨み、汝の如き者に遇ひて、佛法流通の功をなすを得るは、佛祖に對し報恩の一ともなりて最嬉し、瑜珈師地論も説きて聞かせん、其他の疑義をも明かに教へ諭して得さすべければ、心長く此土に留まりて、飽まで教理を究むべし、とぞ云ひたりける。多年の願望こゝに達して玄奘躍り上るはど悦び勇み、王舍城等種々

靈跡を猶詳しく巡覽せしのち寺にといまり、これより學問三
 味に入りける。
 戸羅跋陀大師の嚴密精要なる講義始まりければ、玄奘法師は
 必死となりて、多年の志望を空にはせじ、と耳をそばたて心
 を清まして日々聴聞解怠なきは云ふまでも無く、同に聴く者
 數千人、いづれも疲勞倦を忘れて勉強したりける。五月
 を経て講義は一巡終りけるが、猶遺を拾ひ微を闡かむたりに
 と再度講義ありしに、九月ばかりもかゝりければ、玄奘猶よ
 く殘る限無く意義を明らかに盡さむと、さらに一遍又講せられ
 むことを大師に乞ひ求め、其蘊底を竭しける。法師の好學
 はこれのみならず、願正理、顯揚對法等の論一遍、因明、聲
 明、衆量等の論各二遍、中論、百論三遍づゝ、厭くこともな
 く講を聴き、俱舍、婆沙等は迦濕彌羅にて既に聽講したりし

ゆゑ此寺にて講は聴かざれど、詳しく質問なせるが上、婆羅
 門の書の毘伽羅論までに涉りて學びければ、五年は忽ち過ぎ
 去りぬ。されども法師は猶飽かずとなし、切りに學を食れば
 人の命の短さをもて涯無き學を極めんとするも惡きにはあら
 ざれど、法は流傳せずば甲斐なし、自己ばかりに善を得るを
 可といふべきものにはあらず、今は東土に歸るべし、と戸羅
 跋陀は説き諭し、旅荷を装へ經論を與へける。玄奘これに自
 己も悟つて、まことに命に従はむ、たい此印度に再度來んこ
 とは到底及び難ければ、此所まで來しを幸に、南方諸國をも
 巡廻りて、猶大徳等を訪ひ尋ね、佛蹟靈樹を拜して後に歸り
 去らん、と答へて、假の宿とはいへ住み馴れにける。那爛陀寺
 を後に見なして立ち出でぬ。これより伊爛擊國に至りて、但
 多揭多徳多、辱底僧訶の二大徳につきて一年ばかり停まり學

び、瞻波國を野象の牙にもかゝらで過ぎ、奔那伐那國、羯羅蘇伐刺那國、三摩怛唾國、就摩栗底國、烏茶國、恭御陀國、羯羅伽國を経て南橋薩羅國に婆羅門を師として集量論を學び、案達羅國より馱那迦國に入り、蘇部底、蘇利耶の二僧に就て大衆部根本阿毘達磨論等を學び、二人と共に珠利耶國、達羅毗荼國に至り、獅子國の僧七十餘人と合して、建那補羅國、摩訶刺陀國、跋祿鞞訶婆國、摩臘婆國、契吒國、伐臘毗國、阿難陀補羅國、蘇刺陀國、聖折羅國、烏闍衍那國、獨枳陀國、摩醯濕伐羅補羅國と次第に巡遊して、また蘇刺陀國にかへり阿點婆翅羅國、狼揭羅國に入りしが、狼揭羅より西北は即ち波斯の地なれば、東北に行きて臂多勢羅國、信度國に至り茂羅三部盧國、鉢伐多國と廻り廻りて、鉢伐多の高僧に就き學ぶこと二年に及び、路を東南に取りて摩揭陀の那爛陀寺に

歸り、尸羅跋陀大師に久々にて見え、那爛陀の西にあたりたる低羅釋迦寺といへるに住せる大德般若跋陀羅に二月はじ就きて學びけるが、こゝに杖林山に籠れる一人の異人あり。其人僧にはあらねども、操行高く學博く、勝軍論師と僧俗に呼ばれて、尊ばるゝこと比無し、本は蘇刺陀國の人にして、王系のものなるが、幼稚より學を好み、賢愛論師に從つて因明を學び、安慧菩薩に從つて大乘小乘論を學び、玄奘が師の尸羅跋陀には瑜珈を授かり、教外の四吠陀を初め、天文地理醫方術數にいたるまで根源支葉究め盡さすといふこと無かりければ、摩揭陀國の先王滿智王は使を發して、二十の大邑を與ふべければ國師となりて玉はれ、と請ひ求めしも猶應せず、滿智王崩して後戒日王位を繼ぐに及び、烏茶國八十の大邑に封せんほどに何卒國師となり玉へ、と請ひ招きしも更に動か



で、王の務を知る暇無し、と云ひしのみにて杖林山に潜み居り、朝夕たいに佛經を講じて其徒に教へける。玄奘すなはち杖林山に尋ね行きて、唯識決擇論、成無畏論等種々の論を學ぶこと二年にして那爛陀寺に歸りける。元來佛法廣大にして深く説けるもあり、深く説けるもあり、智慧鋭きものため、に精しく通せしめんと説けるも、心鈍きものに早く悟らしめんため、薬は異なれど期するところは一つにて、諸部の經論各異なるも趣くところは皆同じきに、或は甲を取て乙を識り或は乙を奉じて甲を非とするの弊をまぬかれず、那爛陀の大徳師子光といふもの衆徒のための中、百論を講せしが中、百論を講ずる次に、其論の旨を述べて瑜珈の義を惡様に云ひ假なしけり。玄奘歸るに及びて尸羅跋陀命じて、衆のため攝大乘

其 九

論、唯識決擇論を講せしめしかば、法師は中、百論も知りたり、瑜珈も知りたり、双方の義相背くものにあらずと説き做して遂に會宗論三千頌を著し、尸羅跋陀はじめ諸僧に見せしにいづれも善と云はざるは無かりければ、師子光大に耻辱を取つて、菩提寺といへるに往き、旃陀羅僧といふ僧を觀みて玄奘を論難し負かさんとしける。されど其僧那爛陀に來りて、玄奘法師を見るより黙して復言はず、及び難しと服しける。

戒日王は智略勝れて軍事に賢く教法に心教く、諸小國を打從

へて殆んど統一せんとする當時印度に雙無き英主なりけるが
嘗て那爛陀寺の側に鍍鉢をもて其高さ十丈ほどの精舎を作り
けるに、其隣諸國に傳播りけり。其後恭御陀國を征するにあ
たりて鳥茶國を過ぎけるに。其國の僧どもは大乗佛法を空花
外道の説にして佛の説にはあらずと思ひ居れる雖なれば、王
の來るを見て、那爛陀寺の側にのみ精舎の莊嚴なるを作りて
何とて迦波釐外道の寺の傍には造り玉はざるや、と云ふこと
頗なるにぞ、如何なる意の言葉ぞと問ふに迦波釐と空花外道
と殊ならざるが故なり、と答へける。これよりさき南印度の
老婆羅門般若多といふものありて大乘を破するの論七百頌
を作りけるを小乗の者等嘆重し居けるが、小賢しきもの其論
を取りて王に示し、我等が宗旨は是の如し、大乘の人豈よく
是を破り得るものあらんや、といと誇り氣に云ひければ、王

は笑つて、我聞く狐も鼠の群の中を行く時は、獅子にも勝れ
りと自ら謂へど、眞の獅子を見るに及べば魂魄を失ひ逃げ走
るとか、僧衆等未だ大乘の大徳等を見玉はねば、意義淺薄な
る小乗を固く守りて居るべけれど、一度廣大甚深の大乗に通
達せるところの大徳等をば見るに及ばば、獅子に遇ひたる狐
の如くならん、と答へぬ。僧等はまたも王に對ひて、さらば
双方相對して是非を決定せしめ玉へ、と猶五月蠲も云ひけれ
ば、これまた何の難きことか有らんと、使を發して書を齎さ
しめ、如是くの次第なれば寺中の大徳を選抜して早く鳥茶
國に來らしめたまへ、と尸羅跋陀大師が許へ云ひ遣り、今や
來ると待ち居ける。尸羅跋陀は王が許よりの書を見て、寺中
より海慧、師子光、智光及び玄奘四人を撰び出し、鳥茶國に
往き、王の命に應じて對論立破すべしと命じける。海慧等三

人は心弱くて、勝たば好かれを負けなば我身の耻辱は云ふまでも無く、王のため師のため大乘佛法のため安からぬ事たるべしと、いづれも危み恐れ居るを、玄奘は、小乗諸部の經、律、論は玄奘本國に在りし時より學び知り、迦濕彌羅國に入りし以來遍く學び知りたれど、其教旨をもて大乘の理義を破らひやうも無し、玄奘學問淺くして智慧微なりとは云ひながら、彼等小乗の輩に當るはさらに恐るしともおもはねば、唯小生に任せ玉へ、萬一負くることあるとも貧道は支那國の一僧たれば、關るところも多かるべからず、と慰めける。時にまた一人の順世外道ありて那爛陀に來り論難を求め、四十條の義を書きて寺門に懸け、若し我が論の一條をも論破するものあらむには、我が此首を與へて謝せん、と傲慢を極めたることを云ひけれども負くるを恐れて立敵ふものなかりければ

玄奘自己が使へるものをして、其惡札を取りて捨て、足をもて散々に躡ましめけるに、此體を見て婆羅門は大きに怒り、汝はこれ何者なれば左はせしぞ、と言葉烈しく問ひかゝりぬ此方も怯す、我はこれ摩阿耶那提婆がめしつかひなりと大音に答へける。摩阿耶那提婆とは玄奘がことを美賞て印度の人々の負はせし名なれば婆羅門も夫と悟りて言はぬを、玄奘曉びて寺に入らしめ、尸羅殿陀大師諸大徳等の前に於て次第に對論し始めけるが、婆羅門何とて玄奘が學才に敵ふべき、遂に黙して言を出し得ざるに至り、是非無くも、我負けたれば約のふとく首を授けむ取り玉へ、と云ひける。されども法師は、我が佛法に人の生命を奪ふが如きこと無ければ、汝を我が奴とせん、以後我に従ふべし、と命じて生命を助けやりぬさて烏荼國へいよく往くに定まりければ、先づ彼般若徳多

が作りたる破大乘義七百頌といふを看んとて尋ねけるに、幸
 ひにして書を得たり。法師一々讀み味ふに、數ヶ所其義に疑
 はしきところのあれば、奴とせし彼婆羅門に、汝習て此義を
 聽けることありや、と質すに、如何にも其義は五遍までも詳
 しく聽きたることあり、と答へける。よきことを得たるも
 のかな、此婆羅門に敵の論の義をば残らず聞き置かむには破
 るに最も容易しと、夜に入りては婆羅門に破大乘義を講せし
 め備に旨を得たりければ、其誤謬を指摘なし、大乘の義を申
 べて破り、一千六百頌を作りて、破惡見論と名づけ、戒賢お
 よび大衆等に示しけるに、こは面白し、小乘論師の僻見の立
 つところは失せぬ、と皆手を拍つて歎賞しける。彼婆羅門は
 玄奘のため夜を破大乘義を講せしにより、今は隨意に何處に
 なり行くべし、とて放ち還されければ、歡び出でて東印度に

往きけるが、東印度迦摩羅波國の鳩摩羅王といへるに對ひて
 盛んに玄奘が宏智博學、心寬に才鋭きよしを云ひけるにぞ、
 王は大いに尊信なし、使を法師が許に送りて是乘にと招待し
 たりける。

其 十

法師此際本國へ歸らむ心しきりなれば、佛傳經文なんどをば
 手の及ぶだけ集めけるに、交りて結びたる諸大徳等其事をき
 りて印度は佛も生れたまひし地にて、釋迦は世を去り玉ひし
 も靈跡は尙具に在り、彼所を拜し此所を禮して讀經座禪に道
 の上の清き樂みを取りつゝ一生を送らむに不足はあるまじ、

且支那國は邊鄙にして諸佛も生れ玉はぬ程なるに、何をか懸
 ひ慕ひて今更折角居馴染たる此土をば捨て去らむとし玉ふ
 や、是非に此土に長く住まり、復歸らむといひ玉ふな、と言
 葉を盡して止めければ、法師は、いや／＼聞き玉へ、我が思
 ふことは諸大徳等と異なり、諸佛の教を立てたまふや、成
 べく教の流通して、迷へるもの悟りを得、苦めるもの救
 を得るやうにとこそは思ひ玉ひけり、然るを彼那佛も生れ玉
 はざるほどの邊鄙なりとて輕んじ見るべき道理あらむや、日
 輪は眞きを除き、教法は迷を去る、此教法をば私して我のみ
 幸福を得んことは、玄奘が憐とせざるところなり、と答へて
 諫めに應せざりければ、互ひに問答際涯無し、さらば尸羅
 陀大師に何れが可きかを問ひ定めんとて共に大師が意を聞き
 けるに、流石は大師程ありて、諸僧が玄奘を留めんとするは

朋友の情として道理にはあれど、玄奘が本國に歸らんとする
 はいたづらに故郷の戀しくてにはあらで、未だ尋き教を知ら
 ざる者等に、高く深き教を傳へんとすることなれば、これ諸
 菩薩の心といふべく、眞に慕すべき所存なり、我が心中にて
 汝に望めることも即ち其の事とし、諸僧侶等玄奘を強て留む
 ることなかれ、あら悦ばしきことを聞けりと、甚く玄奘を褒
 めければ、諸僧等もまた争ひかねて各房に退きける。それよ
 り二日を経たりけるに、前の章に記せる東印度なる鳩摩羅王
 より尸羅跋陀大師が許へ使者來りて、支那國の大徳を招待し
 いたしたければ、願はくは師我がために玄奘法師を遣はした
 まへ、と懇懇叮重なる書面をもつて云ひ越しければ、戒賢其
 書を衆徒に示して、さきに戒日王よりも玄奘を招待し來りけ
 るに、今此王の招きに應じて玄奘を遣さむこと、願る戒日王

を軽く視たるやうにて宜しからず、されば是非無し、謝絶るに如かずと、使者に對つて支那國の僧今已に國に歸らむ心算にて残念ながら王の命に従ひ難し、と答へける。鳩摩羅王は答を得て、大きに望を失ひしが、再度使を遣はして、假令は故國へ歸らむとせらるゝにせよ、暫く我が方に來玉はむこと支那法師に於て何程の事かあるべき、願はくは是非に我が望みを遂げしめ玉へ、と云ひける。されども尸羅殿尙許さるれば、世の樂に染ゆるのみにて、いまだ佛法を知らざりしが、支那國の僧の噂を聞きしより私に其人となりて其僧の來るを許されざるといふは、我をば長く迷ひの闇に捨置き玉はむ御所存にや、是非に僧をば遣し玉はずば、弟子も少しく所

存あり、近くは設賞迦王すら猶佛法に仇なして靈跡の菩提樹をさへ毀ふたり、師我が身には設賞迦の方あらじと思ひ玉へるか、御答により象軍を整へ備へて推し出し那爛陀寺を粉微塵と踏み碎き申すべし、と急使を以て云ひ來りければ、尸羅殿陀つくく思案なして、斯程まで鳩摩羅王の云ふこと、或は玄奘が王と宿世の縁ある故ならむ、彼王元來佛法を心に掛くるものならざりしのみならず、彼國もまた信仰するもの少かりしが、或はこれより彼國に佛法大きに廣まるに至らむもまた知るべからず、と其意を玄奘に傳えて、少しき勞を厭ふこと無く使者と共に彼國に到りて見よ、と云ひけるにぞ、玄奘即ち鳩摩羅王が乞ひに應じて出發しける。王は待らに待つたる玄奘の來れるに喜び悦びて群臣を率ゐ迎へ請じ、宮中に延き入れて日々音樂飲食花香等諸の供養を盡し、自己は請ふ

て戒を受けぬ。かくして月餘を經たりけるが、戒日王は恭御
陀國を討つて還りしに、玄奘何時か迎へられて、鳩摩羅の處
に在るよしを聞き、大いに呆れ驚きて、我先に鳩摩羅王が許
しも來らで、今何故に彼所に在るやと、急使を鳩摩羅王が許
に送りて、疾く支那の僧を此方に遣はすべしと求めける
鳩摩羅王は法師を深く慕ひ毎び、自己が王宮より外に出し放
つべくも思はざりしところなれば、戒日王が使に對つて、戒
日王の威勢強きも、我が頭は得玉ふべし、法師は中々得玉ふ
べからず、と云ひ放ちける。使者は還りて此旨を王に其儘告
げられば、戒日王は勃然として、鳩摩羅め我を輕んずるや、
と大に怒り、又たちまち使を遣りて、よし然らば汝が頭を
此使者に直に與へ持來らせよ、と烈しく責めければ、鳩摩羅
王は今天竺に雙びなき戒日王の忿怒に遭ふては國家の立つべ

きところなし、と大に懼れて失言を悔い、象軍を嚴にし船
を織ひて、法師と共に戒日王の許に至り、國らず失言せし罪を
先づ群臣を引連れて戒日王の許に至り、國らず失言せし罪を
謝しけるに、戒日王も畢竟は法師を敬愛せる餘りに云ひ出し
たる過失ならむとて深くは前の語を責めず、たゞ支那僧は那
處にあると忙しく問ふのみ、餘念なし。其夜に及びて戒日は
自ら鳩摩羅が處に到りけるに、鳩摩羅は早くも數千の炬燵の
光りと勇ましき金鼓の聲とに、これ必ず戒日王の來れるなる
べしと知つて、燭を燈げて諸臣と共に遙に立ち出で迎へけれ
ば、戒日王も機嫌よく入り來りて、即ち法師を禮拜なし、頌
贊訖りて後、さて何故に先には我が師を請せしとき來玉はさ
りし、と問へば法師は何氣なく、我が尸羅跋陀大師に従ひて
瑜珈地論の講を聽ける中途なりしが故、と答へぬ。他に猶一

二の問答すみて王は事無く歸りしが、翌朝使者早く來りて法師を迎へければ、法師は鳩摩羅と諸共に戒日王の宮に至るに王は門師等二十餘人と立ち出でて迎へて法師を坐せしめ、珍膳を備へ、樂をなし花を散じて供養の式を終りし後に、玄奘が制惡見論を請ひ受けて見つ、一覽し過として大きに悦び、彼門師に打對ひ、日光出づれば燭火明らかなることを奪はれ、天雷鳴れば鐘の響は聞こえずなるとか、師等の宗旨は皆破れたり、されど云ふべきことあらば試みに此論に對して自家の宗旨を教ひ見るべし、と云ひけるに、さしも陰にて大乘を諷りし者等も云甲斐無く口を嚙みて黙然たり、こゝに於て王はもとより物の蔭にて明ひ居し王の妹も大きに悦び、歡喜稱讚止まざりしが、王は言葉をおらためて師の論まことに大に好ければ、此處にあるもの我を始め諸師等も信じ伏したれど、

猶恐らくは餘國の小乗外道等の愚迷を守りて陋劣を知らざらむことを、されば我が師に望むらくは曲女城に於て一會をなし、五印度の沙門婆羅門外道等に大乘微妙の理を示して我慢の心を碎かれむことを、とて、此日直に勅を發し諸國の者に此事あるよしをば浴く牒知しける。法師は王の言に従ひ、臘月になりて會場に到りしに、五印度中より十八人の國王到り大小乗を暗んせる僧は三千餘人到り、婆羅門及び外道等は二千餘人到り、那爛陀寺の僧は千餘人も到着し居ける。これ等の人々皆いづれも何年の苦學に賊見を煉り、幾處の論難に舌鋒を礪げるものどもなれば、侮り難き俊秀なり、多きは七人十人の從者を隨へ、少きも二人三人連れざるは無く、或は象に跨るあり、或は輿に乗るもあり、幟を押立て塵を塵かし、瓶々汲々と威儀を繕ひ、雲の興り霧の涌くがごとく争ひあつ

まりける。王は先づ勅して千餘人を座せしむるに足るべき二
 草殿と會場の西五里ばかりなるところに王の行宮とを營まし
 め、日に宮中に於て黄金の佛像一體を鑄り、一大象の上に寶
 帳を設けて其中に其佛像を安置し、自ら帝釋に擬して寶冠錦
 服に身を裝飾ひつゝ右に侍り、鳩摩羅王には梵王に擬して寶
 蓋を執り左に侍せしめ、花鬘を着け瓊玉を鳴して堂々と押し行
 き、また二大象に寶花を載せて像後に隨ひ行きながら行くに
 隨いて花を散せしめ、玄奘および門師等を大象に乗せて王後
 に列せしめ、又三百の大象をもて諸國の王と大臣と大徳等と
 の乗り料となし、讚美の歌を唱へつゝ行宮よりして會場に到
 りける。會場の門にて皆下乗し、佛像を寶殿奥深きところに
 入れし後、王と法師等と次第々々に供養を終へ、其後十八國
 の王、諸國の名僧千餘人、婆羅門外道等五百餘人、諸國の臣

等二百餘人を次第に入れて供養せしめ、次に群衆に食を供し
 次に金盤金碗金澡鍔金錫杖等及び金錢三千上氈衣三千を布施
 し、さて寶牀を別に設けて法師を座せしめ、論主として大乘
 を讚するの論意を述べしめ、次に那爛陀大寺の沙門賢法師
 にも讚大乘の論を述べしめ、仍また別に大乘を稱揚するの論
 文を會場の門外に高く掲げて一切衆庶に示し、若し一條にも
 あれ能く論破し得る者あらむには屈せるものゝ首を斬つて相
 謝せんとぞ認めける。されども一人敢て進んで法師と對論せ
 んとするものも夕暮までにいでざりければ王は大きに悦んで
 宮に鳩摩羅と共に歸り、法師等もまた各々歸りぬ。次の日も
 また前の如く供養の儀式を執行し、玄奘をして論主たらしむ
 るに、小乗論師或は外道等一句を吐き得るものも無し。かく
 て五日を經るほどに、小乗の徒外道の輩等は自己が宗をば大

乘論師の加之外國生れなる玄奘がため打破られて、恨を散す
 るところ無く、怒りに得堪えで密々に憎き支那僧玄奘めを殺
 して呉れむと謀りけるが、其事戒日王の耳に入りたりければ
 王は怒りて、愚迷の輩みづからを責むるを知らで人を恨むや
 元來無垢山を見ずして蟻垤を高しなとし、我が親の醜さを忘
 れて鏡を恨む如きものぞも、正しき教を埋れさせ衆生を誤り
 導くこと久しかりしに、支那法師ありて神宇冲曠、智慧深く
 道行高く、眞偽を析つゝの辯明らかに、邪正を糾すの眼鏡く、
 大法を揚げ群疑を開きたるは、思ふこそすべけれ恨とはすべ
 からざるを、猶迷ひをば捨てかねて害せんなど人は不埒至極
 なり、若し法師をば傷つくるものあらむには首を刎ぬべし、
 故なくきて罵らば其舌の根を必ず截らむ、但し自己が是とす
 るところのため論難せんとするは固然るべきことなれば此

限りにはあらざるぞ、公明正大に論せんとせば論すべし、秘
 密に害を加へんなど人は佛の罪人、法の罪人、以の外の曲事
 なり、と嚴しき命を下しけるにぞ、小人共も首を縮めて悪き
 計畫を思ひとまりぬ。遂に定めの日なる十八日といふ間、
 日々論壇に玄奘坐して敵を待ちしも、法師が宏智雄辯に敵ひ
 難しと思ひやしけむ名乗りて出づる者も無く、却つて邪を捨
 て正に歸し、小を棄てて大に入るもののみ非常に多かりけれ
 ば、王はますく玄奘を崇め貴び、金銀一萬銀錢三萬上座衣
 一百領を贈りけるに、十八の國王もまた各々競ふて資を贈り
 ける。さて豫め期したる通り十八日の大會も大乘方の勝利と
 なりて首尾よく終りければ、古來傳はりし式に準じて、支那
 國法師大乘の義を立て諸の異見を破りしに十八日來敢て論破
 するもの無かりしぞ、衆庶宜しく此事を知れと、幢を立て飾

を施せる大象に乗つたるものに玄奘が袈裟を持たせて在々所
 々を布れ廻らしけるにぞ、人々いづれも玄奘が名譽を羨み褒
 めたへて、大乘を信せるもの等は玄奘に摩訶耶那提婆とい
 へる美稱を付し、小乗の徒は木叉提婆と敬ひ稱しぬ。摩訶耶
 那提婆とは大乘天と云へる義にて、木叉提婆とは解脱天とい
 へる義なり。これより玄奘が名は雷の轟くがごとくに五印度
 に鳴り渡りしが。さて十九日に王の許を辭して歸らんとすれ
 ども、王猶止めて我鉢羅耶伽國に七十五日の大布施をなさん
 とおもふにつき、願はくは師も其席に臨み玉へ、と云ひけれ
 ば、振り捨てかねて承諾しける。此鉢羅耶伽國の大施場とい
 へるは古來名高き布施場にして、大河二つの間にあり。他所
 にて布施をなすよりは此場にてする方功德多しと云ひ傳へた
 るほどの靈場なれば、代々の王皆布施の大會をなすには必ず

此場に於てする習慣にて、戒日王も既に五度まで此場にて大
 會を催はせしことありたるなれば、今度は即ち第六度ゆなり
 王は當世無雙の王なり、地は五天竺屈指の地なり、來り會す
 る法師はこれ曲女城の大會に英名を馳せたる玄奘なれば、我
 も其會に預らむ我も其會に洩るべからずと、十八國王も從ひ
 て來り、僧徒婆羅門俗人等も從ひて來りけるは必に、集まる
 もの其數を知らず、初日は例によりて佛供養の式を行ひ、第
 二日目は日天を供養し、第三日目は自在天供養をなし、さて
 第四日目に至りて僧徒一萬餘人に、人ごとくに金錢百文珠一
 鉢衣一具を施し、第五日より婆羅門に施し、二十日餘日を其
 に費し、第六番には外道に施して十日餘を費し、第七番には
 遠方より特に來りしもの共に施し、第八番には諸方の貧孤
 獨の者に施しけるは必に、流石戒日王の五年の間に貯へし富

も一時に無くなりて、身の周圍なる衣服瓔珞耳瑠璃頭鬘の飾りまで残るものとして無きに至りぬ。されども王は少しも意とせず、玄奘に向つて、我斯の如くにして心や樂し、と欣然として云ひければ、法師も王の心の廣さを密に感歎したりける。法師は辭して歸らんとする心大きに切なれば、數次王に其旨を云ひければ、王は中々放つべくもあらず思へば、鳩摩羅もまた願くは師長く此土に止まり玉へと諫むるに、玄奘はとく困じけるが、我幸に法を聽くを得て一人勝れし果を獲むは本意にあらず、且は又佛の廣大無私なる御心にも背かむ、是非に早々故郷に歸り、いまだ支那には渡らざる經路等をも弘通せしめん、と切に云ひければ、戒日鳩摩羅も遮りかねて、遂に法師が意のごとくせしむることに決しける。こゝに於て王は金錢等を贈り、鳩摩羅も種々の寶を贈りけるが、

玄奘はた鳩摩羅が贈りし毛衣ばかりを受け納めて其他を取らず出立しけるに、戒日初め其他の者ども數十里送りて別れを惜み咽びかへりて悲しみける。法師は經文佛像等を北印度王烏地多に頼み托しけるに、戒日王は大衆一頭金錢三千銀錢一萬を更に烏王に附して法師の旅行の費用となし、また玄奘と別れて後三日を経へて鳩摩羅王南印度王杜魯跋多等と共に輕騎數百を率ゐて後より追ひかけ送り、達官四人を付き隨はせ、國書を齎して支那まで沿道の各國王に玄奘を十分保護すべきやう頼み聞ゆるなど、親切懇愨いふばかりなし。

其十一



皇帝李世民が萬機を攪れる頃なりけり。玄奘が表の大意を陳べんに、「沙門玄奘言す。備道は淺きも猶且古人は遠く求めたり。まして諸佛が物を利せるの玄蹤、三藏經を解けるの妙觀を、敢て途の遙なるを憚つて尋ね慕ふこと無かるべけむや。さきに玄奘おもへらく、佛は西域に興り、遺教は東に傳はりしなれば、貴き典は來りしといへども、眞理は尙闕けて明らかならずと。それより常に親しく西土に訪ひ學ばむことを思ふて、身命を顧みること無く、遂に貞觀三年四月、畏れ多きことなれども國の憲章を冒して私に天竺に往き、流沙の漫々たるを踐み、雪嶺の巍々たるを渉り、鐵門峻嶮の途、熱海波濤の路を過ぎ長安より初めて王舍城まで五萬餘里の間を經たり。途中風俗千別に於て艱危萬重なりしといへども、天威に憑りて懸へなく、心願成就して耆闍崛山を觀、菩提樹を禮し

多^た年^{ねん}苦^く學^{がく}の功^{こう}成^{せい}りて、胸^{むね}に大^{だい}乘^{じやう}甚^{じん}深^{しん}の義^ぎを了^{りょう}し、支^し那^な國^{こく}にも
 ま^またか^かゝる俊^{しゆん}才^{さい}ありと、五^ご印^{いん}度^だの僧^{そう}徒^だ學^{がく}徒^だに驚^{おどろ}か^かせしめ、曲^{まが}
 女^{にょ}城^{じやう}の^の大^{だい}會^{かい}に比^ひ類^{るい}無^なき名^な譽^よを馳^はせ、賢^{けん}王^{わう}戒^{かい}日^{じつ}に尊^{そん}重^{じゆう}欽^{きん}仰^{やう}せら
 れたる經^{きやう}律^{りつ}論^{ろん}の三^{さん}藏^{ざう}熟^{じゆく}達^{だつ}の法^{ほふ}師^し陳^{ちん}玄^{げん}奘^{じやう}は、今^{いま}や歸^き國^{こく}の道^{だう}に就^{きう}
 きて、諸^{しよ}邦^{ぱう}を經^{きやう}過^かし、迦^{ぢあ}濕^{じつ}彌^み羅^ら國^{こく}に復^{また}かゝりしが、信^{しん}度^だ大^{だい}河^か
 に至^{いた}りし時^{とき}、五^ご六^{りく}里^りばかりの幅^{はく}の河^かの其^{その}真^ま中^{ちゆう}にて忽^{たち}然^{ぜん}と波^{なみ}風^{かぜ}
 顧^{かへり}ぎ立^たつに逢^あひ、船^{ふね}もほとんを覆^{おほ}へらんとし、經^{きやう}を守^{まも}りし者^{もの}
 は溺^{おぼ}れ、經^{きやう}本^{ほん}五^ご十^{じゆう}級^{きゆう}餘^よを失^うひしかば、さら^{さら}に五^ご十^{じゆう}餘^よ日^{じつ}といま
 りて烏^う長^{ちやう}那^な國^{こく}の所^{ところ}藏^{ざう}の經^{きやう}を寫^し取^とらせなごしつ、次^{つぎ}第^{だい}々^々に
 嶺^{りやう}を越^こえ、辛^{しん}くも干^{かん}闕^{くわつ}國^{こく}に到^{いた}り、表^{へう}をもつて故^こ國^{こく}に自^{みづか}己^がが事^{こと}
 を報^{ほう}じぬ。此^{この}時^{とき}恰^{さか}も支^し那^な國^{こく}は、唐^{たう}の世^よとなりて天^{てん}下^かは一^{いつ}に歸^き
 したるのみか、支^し那^な史^しを讀^よまば誰^{たれ}も記^しすべき英^{えい}邁^{まい}明^{めい}智^ちの太^{たい}宗^{そう}

不^ふ見^{けん}の迹^{せき}を見^み、未^み馬^ばの經^{きやう}を聞^きき、歴^{れき}覽^{らん}周^{しゆう}遊^{ゆう}する十^{じゆう}有^{ゆう}七^{しち}歳^{さい}にし
 て、今^{いま}日^{じつ}に鉢^{はつ}羅^ら耶^や伽^か國^{こく}より葱^{そう}嶺^{りやう}を越^こえ、波^{なみ}羅^ら川^{せん}を渡^{わた}り、于^{こゝ}
 闕^{くわつ}に達^{たつ}したり。將^{しやう}わしところの大^{だい}象^{しやう}溺^{じやく}死^しし、經^{きやう}文^{ぶん}散^{さん}じたるあ
 るため、少^{せう}しく此^{この}所^{ところ}に停^とまりて早^{はや}速^{そく}奔^{ほん}馳^ちし還^{かへ}るを得^えざれど、
 延^{えん}仰^{やう}の至^{いた}り任^{にん}へず、謹^{きん}んで商^{しやう}侶^{りよ}に隨^{したが}ひ、高^{かう}昌^{ちやう}の俗^{ぞく}人^{にん}馬^ば玄^{げん}智^ち
 を遣^{せん}し、表^{へう}を奉^{ほう}じて先^{まづ}づ聞^きす。』となり。七^{しち}八^{ぱつ}月^{げつ}ばかりの間^ま、
 于^{こゝ}闕^{くわつ}の僧^{そう}等^{どう}がために大^{だい}乘^{じやう}論^{ろん}を講^{かう}じ居^ゐけるに、恩^{おん}勅^{とく}降^{かう}りて『聞^き
 く、師^し道^{だう}を殊^{じゆ}域^{いき}に訪^{たづ}ふて今^{いま}歸^きり還^{かへ}るを得^えたるよし。歡^{くわん}喜^ぎまこ
 とに無^な量^{りやう}なり。速^{すみ}に來^きりて朕^{ちん}と相^あ見^みるべし。朕^{ちん}既^{すで}に于^{こゝ}闕^{くわつ}等^{どう}沿^{えん}
 道^{だう}諸^{しよ}國^{こく}に勅^{とく}して師^しを送^{おく}らしむれば、人^{にん}力^{りき}較^{かく}乘^{じやう}も應^おに乏^ひしから
 ざるべし。』との事^{こと}なれば、玄^{げん}奘^{じやう}遂^{すい}に流^{りゆう}沙^さを越^こえて沙^さ州^{しゆう}に至^{いた}り
 表^{へう}を再^{また}び上^ありぬ。西^{さい}京^{きやう}の留^{りゆう}守^{しゆう}左^さ僕^{ぼく}射^{しゃ}梁^{りやう}國^{こく}公^{こう}房^{ぼう}玄^{げん}齡^{りやう}に勅^{とく}し、有^{ゆう}司^し
 づけるを知^しり、西^{さい}京^{きやう}の留^{りゆう}守^{しゆう}左^さ僕^{ぼく}射^{しゃ}梁^{りやう}國^{こく}公^{こう}房^{ぼう}玄^{げん}齡^{りやう}に勅^{とく}し、有^{ゆう}司^し

をして玄奘を迎へ待たしめられける。

其十二

貞觀十九年の春西京の留守房玄奘等法師を迎へて、漕よりして都亭驛に入れ、其日有司等錦帳花旛等を願ち、明二十八日皆朱雀街に集まりて新に到れる經像を弘福寺に迎ふるやうにと道俗に知らせければ、さなきだに古今類なき玄奘が摩を聞きたる甲は乙に、乙は丙にと傳へあひて、民庶の心は何と無く動きたる乙に、乙は丙にと傳へあひて、其日の旦となれば佛像十數軀、經律論等凡そ六百五十七部を二十匹の馬に負せて至るに及び、人々いづれも勇み立ち、街を清めて待つもあり

れば、寶幢を樹て、寶蓋をさしかけ、以て迎ふるものもあり僧尼等は皆整服して威儀かい稽ひ隨ひ行くにぞ、朱雀街より弘福寺まで數十里の間といふものは、内外の官僚都人士にて道の兩側皆填まりぬ。法師は衆庶の讚歎の中に弘福寺へ着き、師が威あつて猛からね風采堂々凛々として應對かしこく、詞論典雅に風節貞峻なるを見て、深く法師を敬愛なし、天下の兵を洛に會して是よりまささに遼瀋を征伐せんとするの時なるをも殆んど忘れしごとく、日の昃くまで語り玉ひしが、猶飽かずとして法師に對ひ、我が軍中に居つて隨ひ行き玉は、軍事の指揮の忙しき中にも師と談論せん、とまで云ひ出すに及びける。陛下の御厚情は忝けれど、法師の身をもて軍旅の間ざれば、陛下の御厚情は忝けれど、法師の身をもて軍旅の間



に立交はるとも寸益なきのみならず、兵戎戦闘の事を觀るをば我が佛法の律には嚴しく禁じあれば、願はくは天慈をもつて哀れみ免し玉はれ、と奏上しければ流石に帝も強ひ玉ひかねけるが、つらく、玄奘を看たまふに、國家の大事をも料理するに堪ふべき人物なれば、師もし還俗するに於ては朕かならずや重く用ひん、と切に歸俗をすしめ玉ひぬ、若し功名のためにする者ならんには大きに悦びて帝の言葉に従ふべきなれど、法師が清き胸中には、もとより自己が榮えを期するやうの念のあらざれば、玄奘幼より佛門に入り世俗の事には實に疎し、今若し還俗するに於ては船を水なきところの上ると同じことにて益無からむ、願はくはたい道のために我が身を終りて聊か國家の恩を報ゆることを得ん、と固く辭退して帝の意に従はず。退きて西京弘福寺に入り、携へ歸りし梵本

の翻譯をなさんと企てたり。これ玄奘が素志なれば、大司空梁國公房玄奘に上申して其保護を請け、其年六月支那一國中にて大小乗の經論に通達なせるをもて名高き法師等弘福寺の靈潤羅漢寺の慧貴を首として十二人、文章の才勝れたるもの普光寺の栴玄を首として九人、字學に達せる大總持寺の玄應梵語梵文を證する大興善寺の玄奘等、其他筆受をなすものも等を撰み集めて、丁卯より法師みづから貝葉を操り梵文を演べ説きはじめて、菩薩藏經、佛地經、顯揚聖、教論等四部を譯し了り、二十年春正月より大乘阿毗達磨雜論を譯し、二月にいたつて法師が辛苦の餘りに得たる瑜珈師地論を譯すに及び、また法師みづから西域記を著し成しける。二十二年の夏五月、瑜珈師地論一百卷を譯し了りて歸りけるに、帝は再び玄奘の鎧衣を脱して居士とならむことをば懲、遊玉ひけ

るが、玄奘さらに勤くこと無く、五義を陳じて謹んで謝しければ、帝其奪ひ得ぬ志を感じてます。悦び玉ひ、かねて自ら作りしことを許し玉ひし大唐三蔵聖教の序をばみづから作りて下し玉ひける。

晝は帝のたゆ留りられては談論し、夜は弘法院といふに還りて翻譯少しも怠らず、無性菩薩が釋けるところの攝大乘論十卷、世親論十卷、緣起隨道經等を譯出しければ、玄奘いよいよ譽れ高く、玄奘がたけ宮廷よりは、大慈恩寺といふを建て、別に尙また翻譯の院を造り、法師を迎へて此に置きける。二十三年皇帝崩じて皇太子立ち、年號も永徽と改まりけるが、法師はそれより慈恩寺にのみ引籠り居て寸時を棄てず、勉勵なし、三更よりして暫く眠り、五更に起き、梵本を讀みて朝より翻譯する下調をなし、朝より暮に及ぶまで其他の時にも過

あれば、新經論を講じ聞かせつ、諸州の學僧等が疑義を教へ決めやりなごして、衆務幅濶すといへども、疲れし態さへ人に見せず。

永徽三年の春三月法師寺門の關に於て石の五重の塔を造りて西域より持ち來りし經像例合萬代經るとも散失せざるため、其中に安置せんことを思ひ立ち、表を附して奏聞せしに、高さ三十丈の塔を石にて築き上げんことは甚だ以て難ければ、概をもつて辨せしめん、との勅詔を奉養府といふもの傳へければ、乃ち甄にて造り、いと莊嚴なるものを成就しける。同年の夏の五月印度摩河善提寺の智光慧天などいふものより白氈一雙を寄せて景慕の意を表せることいと深き書を送り、越しけるが、此等のものは小乘十八部には通達せるも大乘を眼は

ざるの故をもつて偏見をまぬかれざるより、曲女城大會の時
法師に深く折挫され其後大いに心服して、遠く此度書を寄す
るに及びけるなれば、法師も彼等が心を諒していと懇懇なる
書を遣りぬ。同じ六年夏五月は正課の外の間をもつて因明論と
いへるもの、即ち古き論辯の法の書を譯出しぬ。顯慶元年法
師の言葉によつて朝廷より、大慈恩寺の僧玄奘が翻譯の大業
は須らく善美を盡して文義も精を極むべければ、手志、來濟
許敬宗、薛元超、李義府、杜正倫等をして文字の校閱潤色を
なさしむ、との勅下り、天下に博學能文をもつて鳴り響きたる
名士等の玄奘が手下に屬して助け勤むるに及びければ、法師
は感泣拜謝して、誓ひ願ひ必死となりて事に従ひける
が、遂に漸く健康を害ひて、積年身心を勞せし疲れ一時に發
り、殆ど危く見えたりけれど、病中猶も私事を念はず、道家

(支那には現今も尙存する一種の宗教にして、老子を其教祖
と仰げるものなるが、唐の代にては唐の天子の其姓李にして
老子の末なりといふことより、大いに勢力を得つ、朝廷に依
附して道士輩佛徒を凌ぎ、朝廷もまた道士を助けて佛徒を輕
視する傾きなきにあらざりければ、唐の代にては道士と佛徒
と数々論難攻撃しあへることあり、或は朝に野に互ひに軋轢
し居たるさま想像するに餘りある其梗概は佛祖統記なんどよ
いへる書を見て知るべしと佛徒との關係のこと、俗人と出家
と國法上に同じからざるべきこと等二條を慰問の勅使により
て奏するなど、飽まで自己が奉ずるところの宗旨のためにより
を盡せば、皇帝もまた其情に感動し玉ひ、法師が言の如くに
一々爲させ玉ひける。顯慶五年春となりて最も名高き彼大般
若經を翻譯せんとかゝりけるが、此は梵本にて二十萬頌もあ

る廣大無類のものなれば、學徒も剛畧せんことを請ひ、法師も衆意に従ひて、往時鳩摩羅什が翻譯せしごとく重複せるを去り除き、繁雜過ぐるを切り捨て、假令ば簡帙廣大なるに至るとも此を讀まんとするもの、簡帙大なる故をもて懈り退くことなきと決してあるべからざるべし、功を急ぎて勞を厭ふことなきに幾許もあらざるべし、我また氣力漸く衰へ餘生あるべからず、いで梵本に従ひて悉皆翻譯すべし、と勇を鼓してぞ翻じはじめぬ。法師西域より得來りし梵本すべて三種ありて、互ひに入異同あるを、一々省覆校しつ、慎み度み翻譯する此時法師は齡傾き年六十五の老耄なれど、我此大經に命を卒るべき覺悟にて努力するなれば、諸僧も勞苦を辭するなかれ、經部甚だ大なれば毎に此業を終るを得ざるを

懼るゝなり、我人ともに道のため勇猛心を振り起して、決して撓み屈するなかれ、と勇氣凛々且より夕に至るまで孜々と務め勵みつ、諸僧をも勵まし立て、筆を執らしめけるほどに龍朔三年冬十月二十三日といへるに首尾よく成功なして十六會の大説法を集めなしたる大般若經六百卷とて今にまで甚深く微妙の法典として傳はるものは此時成りぬ。されども法師これよりして自ら身力衰耗なし死期や、近く逼れるを悟り、吾もと玉華宮にありしは般若を翻せんためなりしに、今翻譯の素願を果し、幸ひにして大事を遂げ得し上からは、吾が生命も願て盡きなん、我若し死せば極めて質素に山間僻地に安置すべし、不淨の身をば宮寺などに決して近づけ置くなかれ、と門人輩に云ひければ、門徒等大きに泣き悲み、我が師何とて心細きことを今より云ひ玉ふや、羸體病も尙在らざるに不

吉の事を云ひ玉ふな、と慰めけれを法師は、汝等が知るこ
ろにあらす、吾は自ら之を知る、と云ひしのみにて取り上げ
ざりしが、麟徳元年春正月元日翻經の大徳及び玉華寺の僧徒
等いと懇懇に法師に請ふて大寶積經を翻譯せんことを望みけ
るに、法師衆人の情を察して辭むに堪へず、梵本を手に取り
上げて翻すること敷行に及び手を停めて、此經部軸大般若と
殆ど同じきものなれば、氣力衰へて如新なつたる我が精
魂の能く辨じ得んともおぼえず、死期既逼れば是非も無し、
今より佛を禮拜して行道一途に身を盡し、寂然として終らん
とそれより言葉の如くして九日の暮より病といふにはあらぬ
ほどの輕き病を得て、二月四日の夜半に至り、苦みも無く安
然として長き眠りに就きたりけり。玄奘翻譯せしところ合計
七十四部にて一千三百三十八卷、今儼然と尙存し、法益をな

すこと幾許といふことを知らず、眞に釋氏の孝子にして佛道
の忠臣といふべく、また崇むべき學者として、敬ひつべき法
師として傳ふるに足る人といふべし。玄奘三藏死せりと聞
て皇帝哀憫傷痛し玉ひ、朕國寶を失へりと嗟嘆の餘り朝を罷
め玉ひけるとぞ。

釋の慧立といふものあり、三藏玄奘法師を贊して曰く、
生靈感絶。大聖遷神。其能繼紹。唯乎哲人。馬鳴先唱。
提婆後申。如日斯隱。期月方陳。穆矣法師。諒爲眞士。
遙秀天人。不羈塵滓。究玄之奧。究儒之理。深若明珠。
芬同慧芷。悼經之闕。疑義之錯。委命詢求。陵危履蹙。
恢々器宇。魁々賦格。振美西州。歸功東國。屬達有道。
時惟我皇。重懸玉鏡。再理球囊。三乘既闡。十地兼揚。

2/6/34

佛ハツチノミ夫ハツチノミ慧ハツチノミ日ハツチノミ
廣ハツチノミ影ハツチノミ麻ハツチノミ括ハツチノミ
幽ハツチノミ而ハツチノミ更ハツチノミ光ハツチノミ
高ハツチノミ山ハツチノミ新ハツチノミ仰ハツチノミ
粵ハツチノミ余ハツチノミ庸ハツチノミ眇ハツチノミ
清ハツチノミ流ハツチノミ是ハツチノミ濁ハツチノミ
幸ハツチノミ參ハツチノミ塵ハツチノミ末ハツチノミ
願ハツチノミ得ハツチノミ藥ハツチノミ飲ハツチノミ
長ハツチノミ自ハツチノミ蓬ハツチノミ門ハツチノミ
比ハツチノミ之ハツチノミ麻ハツチノミ葛ハツチノミ

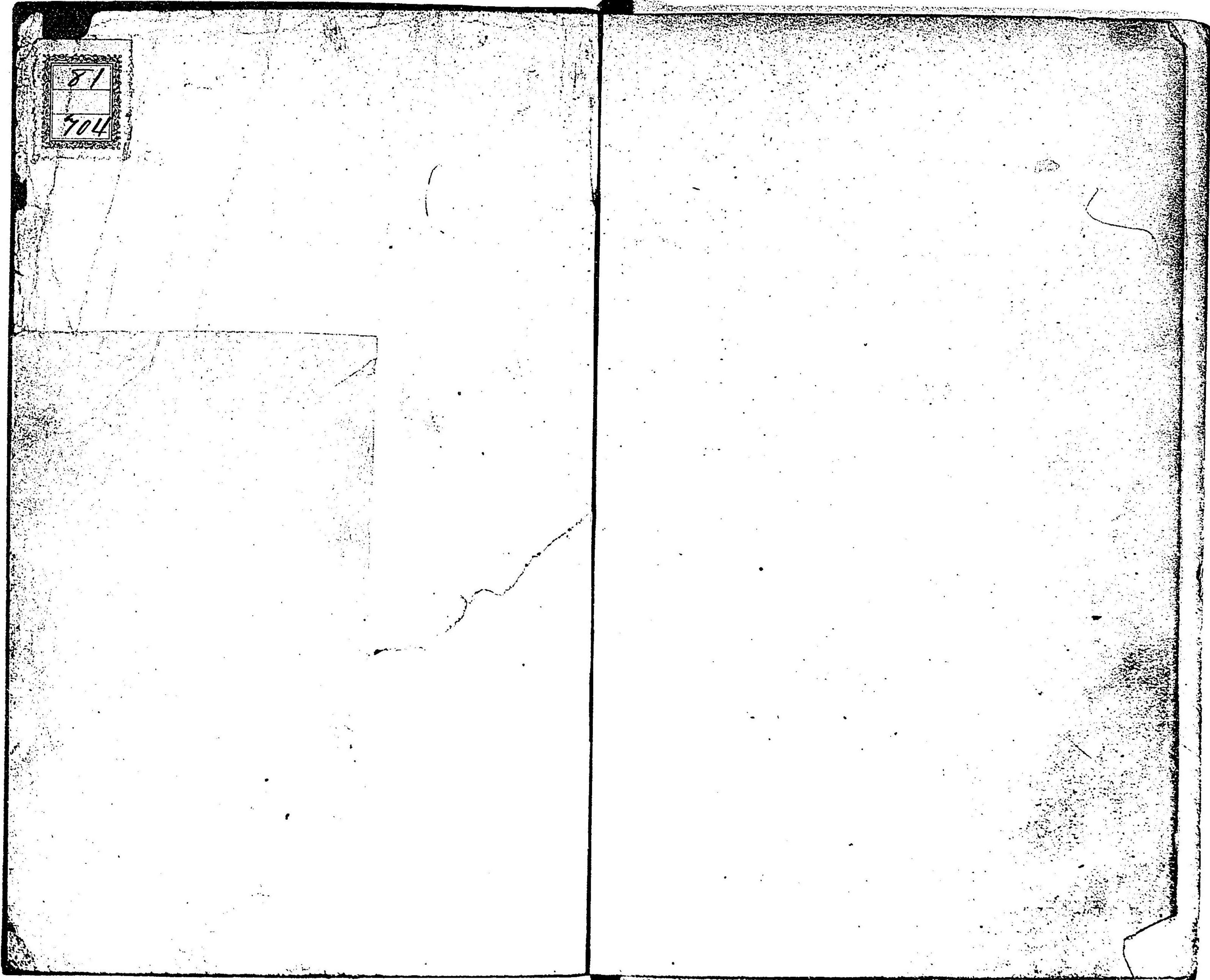
三玄藏眞西遊記終

明治三十五年十一月一日再版印刷
明治三十五年十一月十日再版發行

眞西遊記
著作權所有
定價金四拾錢

著作 幸田成行
發行所 青木恒三郎
印刷所 嵩山堂印刷部
發行所 青木嵩山堂
發行所 青木嵩山堂
賣捌所 嵩山堂支店

東京市日本橋區通一丁目七番地
大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷
大阪市東區心齋橋筋博勞町角
東京市日本橋區通一丁目角
電話四本局七八九番
伊勢四日市市壘町



81
904



是如

實性者則此大衆非等

切世間天人阿素於等以目緣乃至

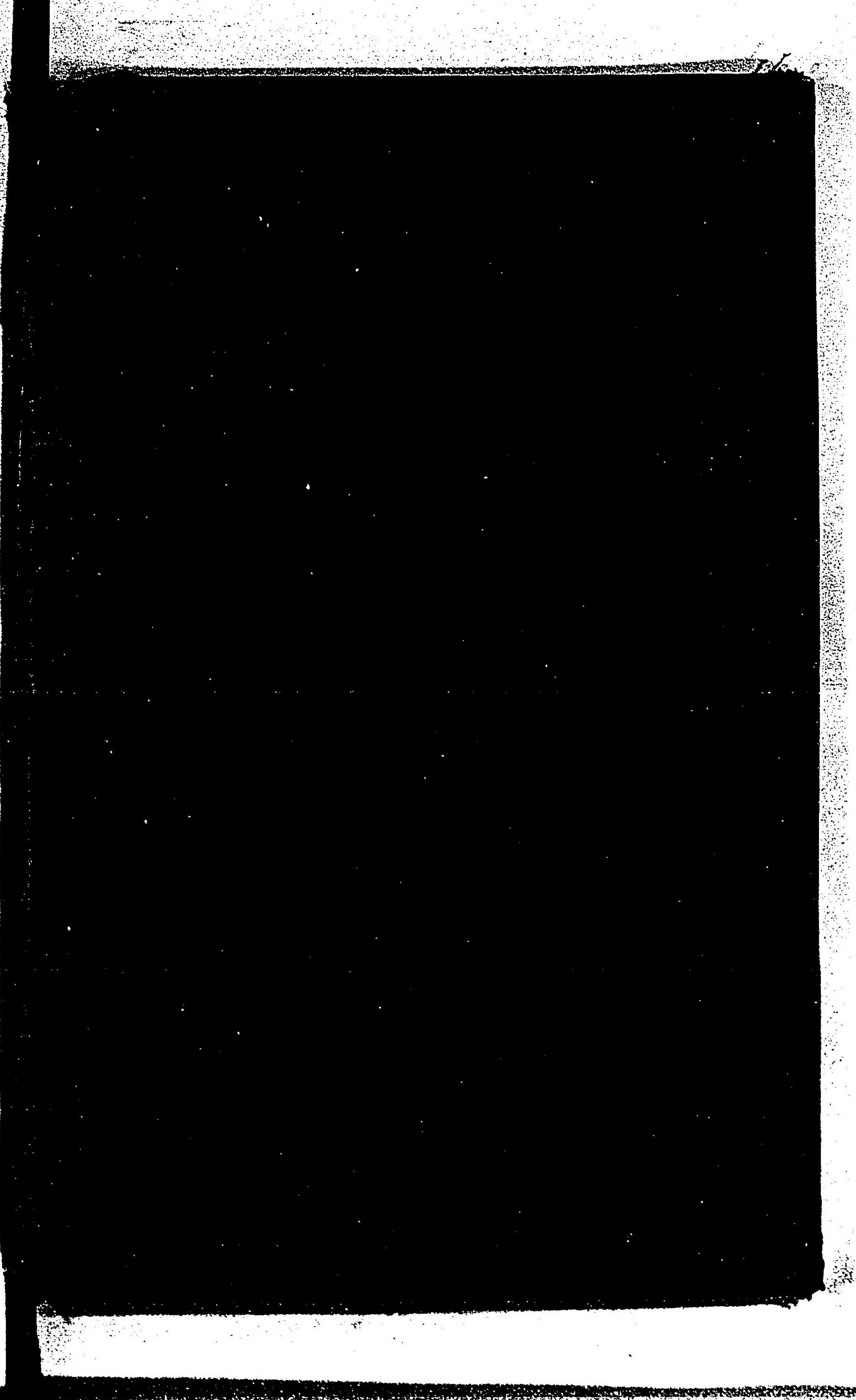
增上緣是遍計所執是

是有

十有五

81

704



205203-000-0

81-704

真西遊記

幸田 露伴/編

M35

EDV-0230



